279.5
13

始

279.5-13

青年團及其教育

大正
6. 4. 28
内交

序言

余、曩に、「新青年團」を著はし、内外の事實に據り、内務、文部兩大臣の訓令を參考として、青年團の本體、任務、組織等に就て說く所ありしも、當時は、尙未だ其の補習教育を細論するに至らざりき。爾來、諸處の青年團を實地に視察し、當事者の間に、尙、幾多の疑問を存するを知り、之を解決せんと欲して、研究怠らず、且、折り〳〵鄙見を述べて、當事者の批判を請ひしに、昨今に及んでは、略、大方の同意

を得るに至れり。是に於て、始めて其の要旨を摘記して、本書を作れり。

余の現代教育に關して、最も遺憾とする所は、其の餘りに形式に泥みて、眞氣を失ひ、動もすれば青年特有の元氣を消磨せんとするにあり。是故に、余の本書中の幾多の議論は、其の如何なる見地より出發するを問はず、之を一貫するに、毎に精力主義の主張を以てせり。就中、最後の一篇の如きに於ては、或は諸老先生の忌諱に觸れんことを恐れたれども、

余の眞意を明白にする必要上、已むを得ず、頗る遠慮なき希望を述べたり。

本書は、專ら青年團の補習教育を說くも、其の根本思想は、余の平素懷抱する教育主義にして、宜しく他の種類の教育にも及ぼすべきものなり。但、青年團の時期は、最もよく此思想を實行するに適す、と信ずるが故に、特に此場合に於て、之を高調しつゝ暢言せるに過ぎず。尙、余の教育主義に關しては、別に「教育及教育學の改造」「公民及勤勞教育論」等の描

著あり、讀者の幸に之を參看せられんことを希ふ。

牛門の僑居に於て

著者識す

大正六年三月三日

青年團及其教育

目次

青年團……一

青年團の起原竝にその變遷……一

農民の武士化……一

ボイ・スカウツと武士教育……三

白虎隊　要するに新事業にあらず……六

外國靑年團の影響……八

青年團の目的……一〇

獨逸の青年教養は修養を目的とす……一〇

我が國の青年團も亦然り……一三

獨逸の青年教養を必要とする社會的事情……一五
獨逸の事情は我が國にも存す……一七
「青年獨逸」の抱負……一九
軍人の手に歸せる獨逸の青年……二一
青年團の軍事教育……二三
快活の氣象……二五
敏捷の擧動……二六
青年團員の年齢問題……二九
不良壯年も亦少からず……三〇
長幼の混同は修養に害あり……三一
反對論の無價値……三三

青年團の設置區域……三五
日本は行政區域　獨逸は團體本位……三五
少くも都市に於ては困難なり……三七
青年團の指導……三九
獨逸では地方委員を以て指導者となす……三九
指導者の養成と府縣視學官……四二
青年團の經費……四四
青年團の教育……四七
公民教育……四八
公民及公民教育……四八

公民の意義如何……四八
公民教育の要は公民精神の陶冶にあり……五一
自治……五二
依然たる斬捨て御免の土百姓……五二
篤志者の模範町村……五四
官治の反映のみ……五五
互尊……五七
自尊他尊の竝行……五七
道理に屈服する良習慣……五九
三個のU……六一
協力……六三

西洋の共衆主義……六三
日本の祭魚主義……六六
不正競爭……六七
萬事に割據孤立す……六九
殉公……七一
東西自治觀念の懸隔……七一
我が國民の自治に慣れざる所以……七四
先覺者の殉公心……七五
殉公心と名譽職の活動……七七
西洋の實例……七八
日本の實例……八〇

伊國自治體の紊亂……八一
組織……八五
組織は獨逸人の特長なり……八五
組織は能率增進の方法……八八
組織は特に我が國に必要なり……九〇
公民精神の養成法……九二
公民精神は知識のみにあらず……九二
見學は聽講に優る……九五
瑞西、丁抹の農民の政治思想……九六
市町村役場は九省の縮圖　英國の政治家……九九
學校訓練に由る公民精神の養成　米國の例……一〇二

獨逸等の例……一〇四
勤勞教育……一〇六
勤勞と經濟　我が國の長袖生活……一〇六
勤勞と生理……一〇八
勤勞と學術……一一二
勤勞と修養……一一五
勤勞と知識……一二〇
勤勞と元氣……一二四
孟子の養氣說と精力主義……一二六
家庭に於ける勤勞の減退……一二九
强き國民は勤勞より生ず　韓非の名論……一三一

更新は社會の進步　理想は將來に在り……一三三
活動は人間の天性　人は皆發明家なり……一三五
勤勞主義の教育起る……一三七
國是としての精力主義……一三八
國民教育家としての國家……一四一
教育的政治……一四三
國家の爲の個人主義……一四六
ケルシェンシュタイナーの勤勞學校……一四八
勤勞教育と公民教育との結合……一五一
公共事業は公共心を養成す……一五三
勤勞精神と充實生活……一五五

勤勞教育は勞働教育にあらず……一五九
心にも汗する勤勞たるべし……一六一
勤勞教育と理想教育……一六五
所謂補充教育の方法……一七〇

愛國的尙武教育

……一七四
鄕里とは何ぞ　平凡なる難問題……一七四
鄕里の心理的觀念……一七六
鄕里の範圍如何……一七九
鄕里の法律的觀念とその範圍限定……一八一
愛國心の本としての愛鄕心……一八四
愛鄕心は積極的なるべし　慕鄕心……一八七

天惠よりも人力……一八九
愛鄉心は海外發展を妨げず……一九二
英獨人の海外成功　英人の家族生活　獨人の
團體生活……一九三
愛國心と愛鄉心　その一致及び矛盾……一九七
愛國心の內容は國に依つて異なれり……二〇〇
西洋には愛國心あつて忠君心なし……二〇三
忠君を樞軸とする我が愛國心……二〇四
教育勅語は天皇の御命令にあらず……二〇六
獻芹の微衷……二〇八
未だ樂觀し難し……二一〇

愛國心は理想主義にして又利己主義なり……二一二
立憲的愛國心　義務の愛國心と權利の愛國心……二一六
愛國心の濫用を戒むべし……二二〇
愛國心の一般的形式としての義勇奉公……二二二
所謂軍人跋扈を防ぐ唯一の方法……二二四
軍務は國民の普通職務なり……二二七
武家政治の教育的功績　士風の維持……二二九
文弱亡國の一例……二三一
文武並行の教育は我が國の誇り……二三八
軍人的精神と國民教育……二四二
運動遊戯の精神……二四五

支那の輕業と獨逸の決鬪……二四六
運動盛んなるにあらず運動會盛んなるのみ……二四八
日本刀を泣かしむる興行的劍舞……二五一
鍛練主義も多少の雅懷を要す……二五四
如何か是青年の眞面目……二五七
事業と年齢　上……二五八
事業と年齢　下……二六四
青年は史上の花……二七一
青年の心事……二七九
老人を戒む……二八九

青年團及其教育

青年團の起源竝にその變遷

湯原元一著

農民の武士化

今日の青年團は、昔の若者仲間に起原すると云ふも、それは形體上の事で、その精神に至つては、餘程異つたものになつて居る。昔の若者仲間は仲間の親睦機關であつて、其の仕事と云ふのは、村社祭典の世話を爲し、又は他村の若者仲間の横暴に對して、自村の弱者を保護する位の

もので、何か國家の公益を圖る爲に存在すと云ふ、確かなる自覺を有つて居たものではない。然るに彼の日清、日露の二大戰役後に至つて、此若見仲間の性質が一變した、即ち此團體の性質が私的のものより公的のものになつた。仲間の中から多くの從軍者を出すと云ふと、その出征を壯んにする爲に送別の宴が開かれる、還つて來ると、その凱旋を祝する爲に祝賀會が催される、其の世話を爲す者は、いつも此若者仲間であつた。其の他、死者、傷病者の吊慰を爲し、出征者の留守宅の世話を爲す者も、亦、此若者仲間が主となつて爲したのである。かくの如くにして、此若者仲間がいつしか直接に公事に携はり、間接に軍事の後援を爲すやうになつて、茲にその性質が一變し始めたのである。それからと云ふものは、平時に於ては、若者仲間は主としてその村の公益の爲に働くやうになつて、今日の如くに勸業、土木、衛生、教育事業等の爲に手傳ひをすることになつた。之と同時に若者仲間は多少自修をも務めて、夜學、擊劍その他各種の運動を勵んだのである。是は固より昔から行はれて居たが、此時分からは特に頗る系統的に、又、一般的に實行されるやうになつたのである。以上が地方就中、農村に於ける青年團の近時の沿革上の瞥見である。此沿革を簡單に評して見ると、此間に於て農民は漸次武士化したのである、恰も鎌倉時代の土地の豪族の家子郎黨の如く、農間には武士としての修業を爲すやうになつたのである。

ボイ・スカウツと武士教育

さて、茲に此事と對照して面白い事實がある。それは、元來舊藩の士

分の子弟の教育と云ふものは、丁度、今日頻りに鼓吹される英國のボイ・スカウツの如きものであつた。ボイ・スカウツの起りは、彼のボアの戰爭に當つて英軍がマフエキング市に於て敵に包圍された時に、壯丁に不足した所からして、少年を集めて斥候に使つて、其の效果の著いのを見て、それから思付いて、戰後之をその本國に於て新に組織したものである。此ボイ・スカウツはその扮裝なども甲斐〳〵しい處からして、之を見ると、一寸目先きが變つて、餘程珍らしいやうに思はるゝが、能く考へて見ると、こんな物は、元來、我邦には昔は一般にあつたものである。舊藩時代の教育と云ふものは、士分の子弟は悉く軍人に仕立てると云ふ目的で、既に十歳以上になると、此頃からして學問の外、武事教育を施したのである。劍術、槍術、弓術、柔術のいづれかその一つは必ず稽古しなければならなかつた、寒稽古、土用稽古の外に遠足もあり、登山もあり、兎狩等もあつて、主として身心の鍛錬に努め、士氣の振作を圖つたものである。ボイ・スカウツのみでない、今日の獨逸始めの青年團の教育法でも、此舊藩時代の青年教育に比べると、決してさう勝つて居るものと許りは言へない、殊に、鹿兒島の山陽の所謂兵兒社の如きは最もよく順序立つて居たものである。それで、北條東北大學總長などは英國のボイ・スカウツを視察して、英國は昔より薩摩と關係があるから、ボイ・スカウツは此兵兒社から思付いたのではあるまいかと言はれたことがある。その當否は且らく措いて論ぜざるも、とにかく、今日の歐洲の青年團は、如何にも能く舊藩時代の士分の青年教育に似て居るのは事實である。

白虎隊　要するに新事業にあらず

次に尙一言したいことは、私は昨年福島縣の若松に參り、一日彼の白虎隊の生殘りの一人と言はれる松本市長に招かれ、その席上で白虎隊の成立を聞いたが、之に依ると、會津は之より先に鳥羽・伏見の戰爭で殆んど二千人以上の損害を受けたのである、二千人以上と言へば、當時會津の戰員の大半であつたから、その後敵を四境に引受けると云ふ段になると、兵員に不足をする、それで已むを得ず十四歳から十六歳迄の青年を集めて軍隊を編成したのが、卽ち白虎隊と青龍隊との二つである。而して愈〻籠城となると、それでも足らぬと云ふので、今後は更に十三歳以下の子供にも武裝させ、又婦人迄も戰鬪の手傳をさせたと云ふことである。それで、又、想ひ起すことがあるのは、獨逸で始めて彼の「青年獨逸」と云ふ團體が出來た時に(一九一一年末)會長ゴルツ元帥の名で各新聞紙上に發表した激文の中に、英、佛、露、墺、伊諸國の青年團に對する政府の保護奬勵の甚だ到れる次第を述べた末に、就中、此點に於ては日本は特に模範的であると言つて、激賞の一句を加へてある。當時の我國の青年團は左程のものでなかつたから、一寸不思議に思つたが、その後ゴルツの他の著書などを見ると、ゴルツは日本の昔の武士には餘程感心して居たやうだから、かう思切つて賞めたのは、全く彼が此昔の武士の教育をも考へた上のことであると解つたのである。

話は大分横路に外れたが、前に戻つて、農民の武士化に對する新しい事實といふのは外でもない。此武士たる士族の教育が全く現代的に

なつて、武士の巣窟であつた城下は、多く商業地として都市になつたのである。而して茲には士族は藩籍奉還と共に家祿に離れて、急にその勢力を失墜して、城下には全く昔の武健の風を見ざるに至つた。その上に徴兵令が布かれて、四民平等に護國の責任を負ふことになつたので、こゝに又、農民の氣風に一變化を來し、かくて、昔の城下の特色であつたものが出でゝ、地方に移つたのである。今の地方の青年團がやつて居る各種の尚武的體操運動などは、是は昔に在つては、唯士族の青年のみが行つたもので、とても片田舍の農村などに居ては見ることの出來なかつたものと思へば、實に變はれば變はる世の中だとも言ひたい程である。

外國青年團の影響

それで、今日の青年團と云ふものは、其の實左程珍いものでなく、昔からあつたものである。詰り、昔の舊藩の士族の文武兩道主義の教育が形を換へて復活したものである。併し、それが又、今日に於て再び勃興するに至つたのは、是には右の如く國内の事情ばかりでなく、外國の先例が、特にその刺撃を與へたと云ふことは疑ひもないことである。初めは英國のボイ・スカウツ、之に就ては前に話した北條總長などの紹介を始め、特に故乃木大將は渡英の折に親しくボイ・スカウツを檢閲されて、酷くその必要を感じられた樣子であつた。それから、陸軍當りでも追々とその調査に從事し、民間でも之に關する譯書や著書も出でゝ、且諸

處でその實行にも着手したのである。而して是が第一は我國在來の青年團に影響を與へたが、それよりも更に一層直接の刺撃となつたのは、獨逸のユーゲンドプレーゲ――之を私は青年教養と譯して置いた――である。是が一昨年の内務、文部兩大臣の青年團に關する訓令の爲に、殆どその手本になつて居る とにかく、その間に非常に密着の關係があると思ふから、之に就ては尙少しく御話を致して見たいと思ふ

青年團の目的

獨逸の青年教養は修養を目的とす

英國にボイ・スカウツの起つて以來は、その評判が却て高く、獨逸でも往々之を學んだ又、獨逸ではボイ・スカウツを譯してバードフィンダーと言つたが、これは小徑を搜し出すと云ふ意味で、詰り、スカウツ即ち斥候のことである。併し、之をやつて見たが、兩國の國情が違ふので、その成績が思はしくなかつた。それで、色々と考へた末に、此バードフインダーを始め、從來から澤山あつた各種青年の團體、即ち運動會、遠足會、水泳會、その他色々な體育を主とする青年の團體を改造して、茲に一種の愛國的、尙武的なる修養上の團體を作り出さうと企てたのである、而して是が即ち前に言ふ青年教養である。一、九一一年の正月に普魯西が率先して、その文部省から之に關する省令を發布し、その後幾もなくバイエルン、サクセン始めの聯邦も之に倣つた。此省令に於て註文してある修養上の要旨は、殆ど我兩大臣のそれと同じである。我兩大臣の訓令が少くも之を參考として居ることは、蓋し疑ひなひと思ふ、先

づ第一に此省令は青年教養と名くる位であるから、その事業を一種の教育的のものと視て居る。元來、獨逸當りには青年團に事業を主とすると云ふことは餘り流行しない、近來は、例へば、山火事消防と云ふやうな事の練習をやらせて居るが、固よりこんな事が主となるのではない、ボイ・スカウツにては掘立小屋の作り方を教へるとか、天幕を張らせるとか、人の危難を救ふとかと云ふことに注意させるも、是も畢竟は青年の修養を目的とするもので、我國の是迄の青年團が行つて來たやうに、事業その物が主となるのではない。獨逸などは、市町村の事業が十分に整頓して居るから、青年團などの力を借りる必要がない、而已ならず素人の力を借りては碌なことは出來ない。又、一體、青年には青年相當に爲すべき仕事があるので、之を他の事業に利用することは成るべく

慎まねばならぬ、と云ふのが、向ふの立前である。こゝらは餘程我國とその事情を異にして居る所である。それで、かくの如く青年教養と名けて、特に青年の修養に重きを置くと云ふ意味を言明したものと思ふ。佛國の昔に在つた青年軍隊と云ふ名稱は、固より好ましくない、英國のボイ・スカウツも亦軍隊臭い所があるので、かく特別の名稱を選んだものだと思ふ。

我國の青年團も亦然り

我國の今回の訓令が、青年團を事業團體とせずして、修養團體としたのに就ては、無論、只此獨逸の例に倣つたと言ふ譯ではない。內務省當りの所見では、青年團が市町村の事業に携はるのは往々弊害がある、今

日迄此青年團に縣の事業例へば、縣道の修繕などを請負はせた處もあつたが、それは多くは失敗に終つた、而已ならず、さうすると、青年團が往々市町村の行政に容喙すると云ふ弊害も起る、こんな次第で内務省の方では青年團を事業團體と爲すことを好まなかつたのである。文部省の意向は詳しくは知らぬが、少なくも内務省程でもなかつたと思ふが、孰れにしても、青年團を修養團體と爲すことには異議のあらう筈はなかつたのである。かくの如く、青年團を修養團體と認めるに就ては、それ〴〵我國の事情があつたからではあるが、併し、愈〻さう決定するには、前の獨逸當りの前例などが、特にその多くの影響を與へたやうに思はれるのである。

獨逸の青年教養を必要とする社會的事情

次に、獨逸では青年團の年限を日本のと同じく二十歳以下としてあるが、是には向ふでは沿革的理由も加はつて居ることを知つて置かねばならぬ。獨逸では、――獨逸許りではないが――遠うの昔から義務教育は八個年になつて、而も都市では、實業補習教育の二個年乃至三個年をも義務として課して居る。都市のみならず、農村に於ても農業補習教育を同じく義務として課することになつて、今はその大部分に於て既に實行して居る。併し、それでも尚滿足する譯にはいかないと云ふので、どうか、教育義務と兵役義務との間に少しの間隙を存しないやうにしたいと云ふ希望が隨分久しい以前からして一部の軍人、教育者

などの間に出て居たのである。處が、世は益〻大平で、商工業は愈〻發展する、すると、富力の增進と共に色々の所謂文明病が流行して、その結果がお定り通り、青年の墮落と云ふことになつた。是も以前は都市に限つて居たが、今日では農村に迄及んだと云ふのは、農村の青年が都市に出入するのみならず、農村の附近に幾多の小工業地が出來て來るので、自然、其處の惡風が到る處の農村の青年に感染する、そこで、獨逸の如き軍國主義の國では、特にその弊害を痛切に感ずるのである。健全なる壯丁は言ふ迄もなく、下士の大部分は農村から供給されて居るのは、其處の青年が隋弱淫靡に流れては、是こそ國家の一大事である。こんな事情からして、青年の保護を今一層親切にする必要が起つて來たのであるが、さらばとて、無限に義務年限を延長することも出來ないので、已む

を得ず、義務教育を了へた青年は成るべく青年團に入れて、茲で前述の如き一種の教育を施すことにしたのである。

獨逸の事情は我國にも存す

獨逸の此事情は我國にも存して居る。特に我國の義務教育は獨逸當りよりもズット短い期間であるから、青年團は我國に取つては一層その必要を感ずる筈である。六箇年の就學で、後は全く文字の必要なき職業に從事した者の壯丁檢査の成績を見ると、中には全くの無教育に均いものもある。況して近頃は不良少年問題も、東京のみならず、地方に迄喧しくなつて居ると云ふ狀態である、從來、有勝ちの品行問題許りでなく、一種の不健全なる思想に根據して、故意に惡事を爲す青年さ

へも見えるやうである。自然主義とか享樂主義とか、頽唐文學とか、遊蕩文學とか云ふことが、臆面もなく公々然と唱へられて、その外にも、一知半解の西洋の過激思想が、大分青年の間に勢力を有するやうになつて居る。そこで、之に對して相當の取締を爲すことも、固より必要であるが、それよりも更に必要なるは、かゝる極端の思想に對して一種の牽制手段を執ることである。即ち之に對して他の健全なる新思想を鼓吹し、尙かゝる極端の思想にかぶれざるやう、特に注意して青年の進路を指導することである。只現今青年の思想の變調に驚いて、急に舊思想の復活に努むるが如きは、却て反抗的に益〻此變調を激成するに過ぎぬ。併し、此指導を爲すが爲には、先以て義務教育終了後の青年を何等かの形に於て集團させることが必要である。而して是がやがて今回の訓令に於ても、青年團を以て修養機關と視做されたる所以であらうと思ふ。

「青年獨逸」の抱負

獨逸では、前述の省令が出ると、民間の有志は起つて之に應援する爲に、「青年獨逸」と云ふ全國に通ずる大團體を作つた。その總裁は皇太子で、會長は過般土耳其で死んだ前述のフォン・テア・ゴルッと云ふ元帥である。尙その幹部に前拓殖大臣のデルンブルヒ等を始め有力なる朝野の名士を網羅して居る。「青年獨逸」は全國に支部を有つて居るが、その支部長と云ふのは多くは現役の軍團長で、その下に文官や議員や實業家等の知名の士から成る幹部がある。而して本部、支部に於ては、全

國に散在する幾多の青年團を糾合し、援助し、奬勵し、又、それが起らぬ處では之を起すやうに盡力するのである。その設立趣意を述べた激文にも見えて居る如く、元來此青年獨逸に於ては、當時獨逸全國の十五歳より二十歳迄の青年は、僅にその四分の一が、何かの團體に加入して居るに過ぎなかつたから、殘りの四分の三をも之に引入れて、こゝで以て所謂青年教養を受けさせんと云ふ目的を以て起つたものである。尤も、此軍團長が支部長を務め、現役軍人が多く此事業に携はることに就ては、社會黨邊りでは大分反對をした。議會でも、社會黨の議員から、見學の爲に來た青年團員を兵營に宿泊せしめて御馳走などするさうだが、これは實に怪しからぬ、國費を濫費すると云ふものだ。又、聞けばゴルッは國費を以て「青年獨逸」の用事の爲に地方を巡廻すると云ふことだが、是も聞捨てならぬ、いざその事實が聞きたいなど云ふ嚴しい質問が出たこともある。之に對しては當局者の辯解もあり、又ゴルッ自身よりも、新聞紙上でその事實でないことを答辯し、加之、「青年獨逸」には自分の身代に取つては不相當の寄附金を出して居る旨も明にした。

軍人の手に歸せる獨逸の青年

それから、一體前の省令には、―普魯西の―青年教養は軍事教育を主とすべしとか、又、之を軍人にやらせるなど云ふ事は一つも書いてない。ザクセンのものには少し許り書いてあるが、併し、「青年獨逸」の方では、それをスッカリ軍人の物にして了つたと云ふ事實になつて居る。嘗て私が「青年獨逸」の事務所を訪ふた時、その應接に出たトロシュケと云ふ軍

人の事務員は、吾々の仕事は是からウント寄附金を集めることだ、それも重に子の無い金持から取る積りだと言つて居た。是は此輩は十分に護國の義務を盡さないから、その代りに金を出させると云ふ意味であつて、彼等が此事業を全く軍國の目的の爲にするものと考へて居る證據である。尚政府では此「青年獨逸」をば、非常に頼りにして、之に多額の補助を與へて居る。であるから、愈〻今回の大戰が勃發するや、否や、政府は時こそ來れりと云ふ意氣組で以て、遠慮なく是迄被つて居た平和の假面を脱棄て、青年教養の事業を文部、内務、陸軍の三省の管轄に移し、その年の八月以來は十六歳以上の青年團員には一定の豫備的軍事教育を施すことにしたのである。是等は則ち獨逸が豫てよりかゝる事實に備へんとの目的で、此事を計畫して居たことを證明するものであらうと思ふ。

青年團の軍事教育

然らば我國の青年團はどうかと云ふに、是も訓令には軍國の爲になど云ふことは少しも言つてない、否、一部の人はそんな事になるを酷く恐れて居る。加之、陸軍の方の人の話を聞いても、恰もゴルッなどの一ゴルッ許りでない、獨逸では一般にさう云ふ考である—の說と同じく、此頃からナマナカな軍隊教育を施すのは却て迷惑だと言つて居る。佛國では以前(一、九〇八年)から青年團に射擊乘馬等の如き軍事上の技術迄奬勵して居たが、獨逸では初めから此事の必要を認めないと云ふ意見であつた。併しながら、我陸軍の方でも軍人に必要なる紀律、服從、

忍耐勇氣等の如き美德は是非養成して貰ひたいと云ふことである。而も現役でないが、豫備後備の軍人は寧ろボイ・スカウツを歡迎して、その世話をして居る向も少くない。それで正直の處を言つたら、一般軍人側の希望は、青年團に成るべく多く軍事思想を吹込んで貰ひたいのであらうと思ふ。私一個の意見としては寧ろそれに贊成である。其事は私の他の著書にも述べて置いたが、特に放漫無紀律の生活は我國民の一大缺點である。西洋では紀律生活は獨り軍隊に行はるゝのみならず、一般の社會に行はれて居る。吾々から見れば、西洋人の日常生活は殆ど軍隊的である、而も是は最も自由を尊ぶ國程一層能く實行して居る。否、實に最も大なる自由は却て紀律の中に存す、と云ふ事實を到る處に於て實驗するのである。而して我國民の此缺點を補ふには、

軍事教育の長所に學ぶのが一番の捷徑であらうと思ふ。それで、私は後に御話する如く、寧ろ明に軍事教育――前述の意味――を以て青年團の必要條件の一と定むることを主張したいのである。但し言ふ迄もなく、獨逸に於けるが如く、青年團を擧げて軍人の爪牙となすべしと云ふ意見を持つて居る譯ではない。

快活の氣象

次に又、獨逸の青年教育の一の特徵として見るべきものがある。それは快活の氣象と敏捷な行動を養成すると云ふ點であるが、此快活の氣象に關しては、英國のボイ・スカウツの教育にも「能く笑へ」と云ふ一個條がある位で、西洋では此氣象を餘程大切なるものと視て居る。多分

是は其の土地の氣候風土の然らしむる結果であらう。英國の常に濃霧に蔽はれて居ることは誰も知ることである。歐洲大陸でもいつも曇天勝ちで、日本のやうな晴れ〳〵とした天氣は唯伊太利に見られる位のものである。さう云ふ所からして、自然、人間の氣象も陰鬱になり易い、その上に、社會の生存競爭が烈しいので、落伍者に至つては、苦悶の結果、益陰氣な性質になつて了ふことを免れない。而してこんな人からして、得て危險人物などを出すものである。此快活の氣象を養成することが、我國に於ても同樣必要であるか、どうかは一つの疑問である。西洋人の眼から見ると、日本人ほどよく笑ふ國民はないさうである。或獨逸人の書いた書物には、

日本では罰を受けた子供も、褒美を貰つた子供と同樣に微笑し、鰥夫も、花聟も、行政官も、裁判官も、警官も、軍人も、泥坊も、人殺も、僧侶も、乞丐も、總ての人が微笑して居る、日本全國が微笑して居る。

と述べてある。實際困つた場合に迄笑ふのは恐らく日本人許りであるかも知れない。併し、よく笑ふからと言つて、それでその人は快活の氣象を具えて居るとも謂はれない。女子はよく笑ふが、元來は陰性のものである、少しく困難に逢へば、則ち落膽し、失望するのは、男子よりも女子の方に多い、所謂死生の間に談笑すると云ふ位の大勇は、唯男子に於てのみ見られる氣象である。それで、日本人の笑も餘り當てにはならない。眞の快活は困難に逢ふても容易に變はらぬものでなければならぬ、機嫌に任せて笑つたり、泣いたりするのは、眞の快活とは謂はれない。さうして見ると、我國に於ても、亦此氣象の養成が必要である

やうである。但し、言ふ迄もなく、その養成は唯笑の養成ではない、これは既に持合せが澤山過ぎて居る。眞に身體を健康にして、物事に屈托せず、鼻歌を歌つて敵陣に斬入る、と云ふ如き勇氣を兼ねたる快活の氣象を養成することが必要であると思ふ。彼の戀愛小說などを耽讀して、青瓢箪のやうになつた神經家の青年間に多くあるのは、固より大に憂ふべきであるが、さらばと言つて、餘りに細心過ぎた窮屈な謹直家も多く出したくないものである。要するに、青年は青年らしく伸び〳〵して、元氣充實した性質を具えるやうに敎育しなければならぬと思ふ。

敏捷の擧動

又敏捷と云ふこと、是は原文には「身體を有効に働かし得る青年」を養

成するとあるのを、私が勝手にその意味をとつて、かう言ふのである。西洋人は根氣は強いが、一般に遲重で牛に似て居る。是は戰爭などには最も不便である。そこに行くと、日本人の行動は極めて輕快である、活潑である。それで、今少しく紀律に慣れると、その動作の能率は大したものになるだらうと思ふ。併し、根が我國民の長所であるから、我訓令には、獨逸の如く特にその養成の必要を說かないのであらう、否若しこんな事迄も注意しやうと思へば、寧ろ反對に耐久力の必要などに關して說いた方が、我國の事情には適するであらうと思ふ。

青年團員の年齡問題

不良壯年も亦少からず

次は年齢問題であるが、是は獨逸及び我國の規定は極めて合理的だと思ふ。修養を主とする以上は是非さうなければならぬ。青年團と稱しながら、三十歳以上の者迄も加へるのは、既に誤つて居る。又、年長者が居れば年少者の爲に利益であるかと云ふに、必しもさうでない。そこで、普魯西でも廿歳以下のものに就て、更に之を十七歳を界として二部に分つて居る。人間は滿十七歳に達すると、その思想に餘程の變化を起すものである。此時期に於て子供が若者になると、最早小供の眞似はしたくない、之を一緒にするのは良くないと云ふのである。況して廿歳以上、而も三十歳以上の者迄も加へることは、餘程の考へ物である。これは、唯思想の相違から見て必要であるのみならず、普通の場

合には、却て年長者が年少者に惡模範を示す例が多い。世には不良少年もあると同じく、不良壯年も、不良老年も居ることを知らねばならぬ。加之、年齢の異つたものが一緒に居ると、年少者は年長者に對して遠慮して窮屈な思をする。老人などから御説法ばかり聽かされる集會の後には、年少者は二次會を開いて、更に浩然の氣を養ひたくなるものである。孰れにしても、餘り年齢の懸隔あるものを集めて一團とするのは、利益よりも、寧ろ弊害が多いと思ふ。

長幼の混同は修養に害あり

特に、今後の青年團は修養を以てその主なる事業と爲すことになれば、愈以て老年は勿論のこと、少年壯年の混同を避けねばならぬ。補習

教育も行く〳〵は學年制にして、學力に相應する學級の區別を設くることになるであらう。かゝる場合に於て、廿歳以上の年長者迄も加はつては、とても、規則正しい教授を施すことは出來ない。然らば廿歳以上の者は一切構はんでも宜いかと云ふに、さうでない。私の考では、此二十歳以上の者には通俗教育を施し、その以下のもの、卽ち青年團員には補習教育を施すことに致したいのである。詳しく言へば、前者には各種必要の講演を聽かせ、後者には一定の學校風の教育を施したいのである。青年團がかゝる補習教育を以てその中心と爲さざる限りは、到底、立派なる成績は擧がるまいと思ふ。今日のやうに唯體育を主として時々運動會を開く位では、今に飽きが來るに相違ない。矢張り、無限の知識慾に訴へる學校教育が一番永續して、而も有効であると思ふ。

反對論の無價値

然るに此年齡問題に就ては大分異論もある。廿歳以下と制限したに因つて在來の青年團は大打擊を蒙り、殆ど破壞されるに近いと言ふものさへもある。第三十七議會にも或議員より質問が出た位である。それで、一時は當局者の間にも、今少しく制限を寬和する必要はないかと迷つたこともあるやうである。が、併し、私は苟も青年團を修養機關とした以上は、此制限は適當であると思ふのである。又、好し此制限を勵行したからと言つても、一方には年長者は援助者として、依然青年團の爲に働く途を通牒に於て開いてある。而已ならず、現在のまゝにしても、其の中の廿歳以下の分丈を新令に合ふものとして取扱ひ、それ以

上の分は何とか名けて、別に存置しても一向差支はないのである、此分は追出して了へとも何とも言つてない。丁度、同じ小學校の中に尋常科と高等科を併置するやうにすることも出來ると思ふ。但し、公に青年團として認めらる分は下の方で、上の方はさうでないと云ふ許りのことである、詰り、下の方丈に對して、今回新に政府から註文が出たと云ふ風に解釋しても可からう。尤も此註文その物が氣に喰ぬと云ふことであれば、其は自ら別問題であるが、併し、此註文に對しては、私の知る限りでは、何人にも大した反對はないやうである。十三や十四の少年に迄も、從來の青年團の爲すやうな仕事を課する許りでは、敎育上決して善いことゝは謂はれない、又、課しても滿足には出來ない。就中、此頃は正に人の爲よりも、寧ろ己の爲に出來る丈の修養をなすべき時である。加之、私の地方の經驗に依ると、今日では最早此訓令の不便を感じ、又はその實行難を訴ふる者は極めて少いやうである。而已ならず、此訓令の爲に從來の青年團の弊害を一掃し得たことを喜んで居る者さへも少くない。今一例を擧けて見ますれば、宮城縣廳から公にせられたる報告、昨年「斯民」十月號參看)は卽ちそれである。以上の理由及び事實に依りて、私は此訓令の年齡制限は、極めて適當なる處置だと思ふのである。

青年團の設置區域

日本は行政區域・獨逸は團體本位

次に、獨逸の青年團の設置區域は行政區域とは沒交渉になつて居る。

日本の如く市町村をその區域として組織すべしと云ふことになつて居ない。殊に都市の如きに於ては幾多雜多の團體があつて、それが皆互に獨立して居る、而して之を統一することは到底不可能である。又、政府の方でも強ひて之を統一することを望まない。唯その目的丈に於て一致させんと欲するのみで、その他は成るべく各自にその特色を發揮せしめんと努めて居る。此事は前の省令の初めにも斷つてある。而してその言草が一寸いつもの獨逸式と異つて居て面白いから、丈にその一斑を示すことにする。

予(文部大臣)が如何樣に此事(青年教養)を處理して貰ひ、又、如何樣に此事に從事して貰ひたいかと云ふ精神に關して、初めより世人をして一切の疑惑を起さゞらしめんが爲に、予は、茲に、青年教養は一切の官僚的形式と相容れざることを明言す、却て目的に依つて定められたる範圍内に於て、竝に同一目的を追求する者と接觸を失はざる限りに於て、總ての特有能力をして出來るだけ自由に發展せしむるを以て、最も缺くべからざる事と思ふ云々。

何と、獨逸の役人もうまい事を言ふではないか。併し、實はこれが近年の獨逸人の一般的思想である。獨逸人を飽く迄も保守一方の國民だと思ふのは、その怜悧の半面を見落したものである。

少くも都市に於ては困難なり

餘談はさて措いて、此點就中、都市の青年團に關しては、我國に於ても同樣であらうと思ふ。將來都市に於て青年團が普及する場合を想像

して見て、その場合に一市の青年を一つの團體に統一せんことは到底不可能である。東京市の如きに於ては、此訓令の年齡に相當するものは、男子丈でも蓋し十萬以上であるであらう。かゝる多數の青年團を一團として甘く指導するには、戰時の二個軍團を指揮するにも匹敵するものであるから、指導者等にもそれ〳〵特別なる有力の人物を要することになる。加之、かゝる多數の者に統一的な教育を施すが如きは、言ふ迄もなく到底不可能である。それで、都市を設置區域として青年團を組織すると云ふことは、恐らく事實上では空文に終つて、而して都市に於ては但書が却て本文に代つて、その働を爲す場合が多らうと思ふ。(通牒參看)尤も農村に於ては本文通りの實行が出來る。補習教育は各小學校で別々に施しても、その他の事業は共同して經營することが出來る。又是も私の地方の經驗では、既に實際實行されて居るのみならず、此方が經費その他の諸事に便利だと言はれて居る。一體農村の生活は都市の如く複雜でないから、此處にては都市の如く色々と性質の異れる青年團を設くる必要がない。詰り、青年團の性質から見ても、統一が爲し易い、否、統一を爲すのが、却て便利であるのである。併し、統一と言つても、それを無理にするのは無論善くない。此處でも矢張り便宜但書を適用することを怠つてはならぬ。

青年團の指導

獨逸では地方委員を以て指導者となす

尙、獨逸の例を考へて見ると、此國の方針は前述の通りであるが、併し

又、別に地方的に保護奬勵の途を立てゝ居る。普魯西では州、縣、郡、市町村に青年團に關する委員が設けられて、此委員には總ての方面から、就中、政黨宗派の代表者や、辯護士、醫師、官吏、敎員、實業家等の有力者を網羅して、此事業は國民總掛りでやるべきものだと云ふ主意を明にしてある。此委員が各自の地方限りの青年團の世話を爲すのである。青年團は各自獨立して居るも、その世話する機關は地方的に、而も系統的に統一されて居たのである。是はその顏觸れから見ると、我國の援助者に當るが、併し、唯援助者たる許りでなく、指導者ともなつて居るのである。卽ち此委員が大體の方針を定めて、而してその中に實行委員と云ふものがあつて、是が實際の指導を爲すのである。我國では小學校長を指導者として、地方の官民を以て援助者となしてあるが、獨逸では實

際の指導者は此地方委員の指揮に從ふことになつて居る。是は全く彼我の民情の異るに基くもので、向ふでは合議制を執行機關とするが殆ど自治體の常であるやうに、此處にも亦、その慣例に依つて居るのである。處が、我國ではどうもそれが甘く行かない。それで、此場合にも單獨制に依つて指導者を設けたものであらうと思ふ。併し、所謂援助者の責任を重くする上から考へて見れば、現在のまゝではどうも遺憾が多い。小學校長位の相談相手になるのは嫌だと、內心には考へて居るものも少くないやうである。そこで、私は平生から考へて居る、矢張り獨逸當りの例に倣つて、縣知事、郡長、市町村長の相談相手として、青年團に關する委員を設けてはどうであらうと。今日の處では差當りその必要はないとしても、將來青年團が勃興して全國到處に普及するに

至れば、その指導に關しては種々なる難問も生ずるに相違ないと思ふから、これを解決するには、餘程多方面の知識技能を要することである と思ふ。

指導者の養成と府縣視學官

次に又、是は今日でも既にその必要が認められて居るが、縣當りに指導者の指導者とも云ふべき者を特設する事である。既に一二の縣では此目的で然るべき人を囑託せんと欲して居るも、その人を得ないで困つて居る。青年團の指導は學校の教授の如く單調のものでない。少くとも未だ之に就て特に研究されて居ない、之に關する教育學もなければ、又教授法、管理法も著はされて居ない。これから追々と經驗を

積んで工夫して行くより外はないのである。純然たる事務家の仕事でもなく、又純然たる教育家の仕事でもない、却々以て困難な事業である。青年心理に關する飜譯でも讀めば、それで十分だと思ふのは大なる誤解である。こんな次第であるから、その人を得ないのも無理はないが併し、是非ともその人が必要である以上は、今から之を養成しなければならぬ。幸に來年度よりは地方に昔の視學官が復活して、之には經驗ある教育家を採用する豫定であるから、そこで、之をして兼ねて通俗教育や、青年團の事に當らしめたら可からうと思ふ。勿論、それにしても相當の準備的研究を要する、唯これ迄學校を經營した流儀を其まゝ應用する丈では必ず失敗する。青年團は青年團として特に研究して、後に始めて之が指導の方針を定めねばならぬ。併し、根が教育に關

して學識もあり、經驗もある者であれば、假すに多少の年月を以てすれば必ず相當に見るべき成績を擧ぐるであらうと思ふ。

青年團の經費

最後には經費のことであるが、是は今日の如く團員の勤勞の所得を以て支辨するを本則とするのは、餘りに冷淡である。一片の訓令で以て地方の負擔を增すのは宜しからずと云ふ理由もあつたらうが、何と云ふにも、將來は男子のみにても三百萬人(訓令に依りて概算す)にも達せん豫定の青年團員の教育を有効に施して行うと云ふには、別にその經費の出處を考へて遣らねばなるまい。特に今後の青年團は修養を以てその主たる事業となすに於ては、從前の作業本位の時代に比すれ

ば、團員の勤勞より得る收入も自然減少する譯である。加之、餘り年少の時から、働いた金でなければ教育は受けられないと云ふとにするのは、一般に苦學生風を鼓吹する所以であつて、青年教育上好しからざる結果を生ずる恐もある。況んや實際に於ては補習教育を施すと云ふのであつて、而も既に地方に依つては、團員の申合を以て之を義務として課して居るに於ては、何時迄も何等公費の援助を與へぬと云ふのは、抑〻不條理である。西洋では、補習教育の爲には十分に金を出して居る上の事であるから、青年團の經費は一定の公費に依らぬことにして居るが、併し、それでも、普魯西の如きは、戰爭前には政府から二百五十萬マークの補助金を支出し、その外に、公共團體の補助もあり、又、前述の如く「青年獨逸」の如き非常に有力なる團體があつて、極力寄附金を募集して、

之に依つて青年團の後援を爲して居たのである。佛國に於ても、軍事的豫備教育を施す青年團には、政府補助金の外に、士官の派遣とか、武器の貸與とか、鐵道賃金の割引とか、色々の援助を與へて居て、その他、露、墺、伊の諸國の青年團に對する保護的態度も略同樣であつた。然るに我國の青年團は、將來に於ては政府で是非行つて見たくても、事情が許さない所の補習學校の代用を爲すのであるにも拘らず、その經費は團員各自の勤勞の所得で以て支辨せよと云ふのは、是こそ難を人に責むるものであらう。それで、私は責めて之に對して政府、及び公共團體の補助の途位は、開いて置いても可ささうだと思ふのである。

青年團の組織の事に關しては、尙以上の外にも言ふべきことも多々あるが、是は別に「新青年團」と云ふ拙著に述べて置いたから、別に取り立てゝこゝには云はぬことにする。併し大體に就て評すれば、今回訓令の此の組織に關する主旨は、之を理論上から見ても、又、實際の施行上から見ても、別に大なる不都合はない。而已ならず、此訓令の出た以來、その效果は着々現はれて、而も將來に於ては、更により大なる成績を收めんとして居る。

青年團の教育

然らば青年團教育の內容は如何。言葉を換へて言へば、青年團を修養機關と視て、其の修養の目的及び方法は如何。是が次に起つて來る所の問題である。私は訓令の主旨を前後總合して見て、青年團の教育は國民教育の繼續たるは勿論であるが、特に公民教育と勤勞教育との

二者に重きを置きたるものと考へるのである。尙其の外に愛國的尙武教育とも名くべきものを加ふれば、それで先づ青年團教育の特質は悉されるであらうと思ふ。公民教育、勤勞教育、愛國的尙武教育、此三つの者を私は青年團教育と云ふ鼎の三本足と視たいのである。因りて、次にその一々に就て、漸次意見を述べることにする。

公民教育

公民及公民教育

公民の意義如何

獨逸邊りでは、ビュルガー(公民)をシュターツビュルガー(國家公民)とゲ

マインデビュルガー(市町村公民)とに區別して、今日では殊に國家公民教育の必要が力說されて居る。日本で現代的意味に於て公民と云ふ文字を使用したのは、明治二十一年發布の市制町村制に市公民及び町村公民の名稱を見るのが、その始めである。是は當時の雇外國人たるモッセの草案——此草案は無論獨逸の制度に依つたもの——に在るゲマインデビュルガーの譯語である。卽ちゲマインデベウォーナー(市町村住民)に對して、一定の年齡に達し、財產を有して、市町村の行政に參與する權利と義務とを有する者をかく名けたのである。それで、昔の宣命等に見ゆる大寶の漢譯たる公民とは文字は同じでも、その意味は餘程違つて居る。大寶は人民を大なる寶の如く大切なものと視ての名稱であつて、之をかく譯したのは、これで以て百姓は皇室直屬の公けの人民

であつて、地方豪族などの私有すべき私民でないとの意味を表はしたものである。今日の如く國家より與へられたる公權を標準として、特に區別せられたる一部の國民を指して言ふのではなかつた。又、市町村公民に對して國家公民と云ふ用語は、我國の法規上には見えないが、獨逸の例で言へば、國家の政治に參與し得る人民のことであるから、議員の選擧、又は被選擧權を有するものが、卽ちそれである。それで、私は訓令に言ふ公民には、市町村公民も、國家公民も共に含めあるものと視たいのである。詰り、地方の公共團體の行政や、國家の政治に參與して、善くその職責を盡し得る人間を養成するのが、卽ち此公民教育の本旨であると思ふ。而して又、かゝる公權を與へて、國民と共に中央地方の政治をやつて行くのが、卽ち立憲政體の本則であるから、此教育は又、之を立憲的教育と謂つても可いかと思ふ。現に世間の一部でも、さう言つて居る者も少くない。

公民教育の要は公民精神の陶冶にあり

然らば此公民教育は如何にすれば可いかと云ふに、私は先づ青年團と直接の關係ある市町村公民の教育に就て說いて見たいと思ふ。それは、之を說くと、自然に國家公民教育の如何にすべきものなるかも解かれるからである。

世間では、よく公民教育を盛んにするには、先以て法制經濟の知識を授けねばならぬと云ふが、是も固より必要である。併し、言ふ迄もなく、知識許りでは公民の資格は出來ない。恰も法律の知識あるものが、却

て法律を濫用するやうに、憲法や、市町村制の講義を聽いた者に、却て立憲國民として不適當の人間が多いこともある。それで、私は知識よりも寧ろ精神に重きを置いて、此公民教育を施すの必要を認むるのである。然らば如何なる精神が、公民就中、市町村公民として最も缺くべからざるかと云ふに、

自治

依然たる斬捨て御免の土百姓

是が第一に必要である。市町村は今日は自治體と言つて、或程度迄は獨立自裁することを許されて居る。此目的を達するには、先以てその公民たるものに獨立自治の精神が具はらなければならぬ。是は殆

ど言ふ迄もないことである。元來、教育の目的と云ふのは、一口に言つて了へば、兒童を導いて獨立自治の域に達せしむると云ふことに外ならぬのである。それで、西洋の教育を見ると、既に家庭の時代からして、一に此目的を自覺して行つて居る。例へば、子供が倒れて泣出しても、母親は自ら起きる迄打棄てゝ置き、日本で見るやうに直ぐ駈附けて劬るやうなことをしない。何處迄も「自助は男子の事だ」と云ふ格言を勵行して居るのである。獨立自治の出來ない人間のその國に多いのは、詰り、それ丈人間の頭數が少いと同じことである。少くも人間でない奴隷同樣のものの多い譯になる。他力にのみ依賴する住民の多い處では、自治體も亦矢張り他力に依賴する。補助運動に巧みなるを以て市町村長の能事となすが如き惡習は、自治體の健全なる發達を妨ぐる

ものである。西洋には金を出して獨立を買ふた都市の例さへある。然るに日本の町村の中には豫算を郡長に内示し、その承認を得て始めて之を町村會に提出するものさへ少くない。何か事あれば、ぞろ〳〵と郡役所や、縣廳に推掛け、平身低頭以て嘆願に及ぶ、お指圖を仰ぐ。これでは全で昔の斬捨て御免の土百姓の態度である。

篤志者の模範町村

近頃評判の模範町村にしても、その好成績は二三篤志者の盡力の結果であつて、多數の住民は唯その指導に從ふたゞに過ぎない例もある。そこで、此少數の篤志者が亡くなると、所謂その人なければその事休むであつて、折角の好成績も何時の間にかフイになつて了ふのである。それであるから今日に於てはかゝる篤志者の出ることは切望に堪へぬことである。又、所謂中堅人物をも出來得べくんば養成したいのである。併し、若し理想を言へば、公民の總てが此篤志者の心になつて、自治は公民の自治であつて、篤志者のみの自治でないやうにしたいのである。

官治の反映のみ

又、近頃は内務省に監察官と云ふ者が設けられ、府縣にも亦定期視察の制が定められた。此事その物は誠に結構である。併し、その半面には、自治體が自治體としての責任を盡し得ないと云ふ事實を含んで居る。若し此不斷監督の結果として市町村の成績が擧がるとすれば、そ

れは自治體が善くなつたのではなく、監督の効果が現はれたのであるから、當分の處先づ之を官治の反映として視るのが可いと思ふ。いづれにしても、今日の我國の自治體には、實は自治體などゝ呼ぶも如何かと思はれるものが多いのである。而して是と云ふのも、畢竟は國民各自に獨立自治の精神が缺けて居るからである。西洋で、特に英國や、獨逸で自治體が健全に發達して行くのは、その國民各自が既に十分自治的精神に富んで居るからである。制度は詰りその國民の精神が法律の條文になつて現はれたものに過ぎないのである。シュタインは普魯西市制の創造者と言はれるも、普魯西の市制の甘く行はれるのは、全くその公民の自治的精神に基くことである。然るに我國では先づ法律を作つて、然る後にその國民の精神を、之に合ふやうに養成して行かうと云ふのであるから、その事情が餘程西洋とは違ふ。隨つて、又、我國では教育上でも一層骨折つて、國民の獨立自治の精神を陶冶せねばならぬと云ふことになる。

互尊

自尊他尊の竝行

獨立自治の精神も必要であるが、獨立は孤立でない以上は、他の獨立と竝行する範圍内に於ての獨立でなければならぬ。他の獨立を妨害する獨立は、やがて又、他から妨害せらるゝ。己立たんと欲すれば先づ人を立たしむと云ふ心掛が最も必要である。己の獨立を尊重する人は、同時に他の獨立を尊重する人であつて、又己の名譽を重んずる人は、

同時に他の名譽を重んずる人でなければならぬ。然るに我國民は未だ此精神の修養が不十分である。と云ふのは、よく他人の惡口を言ふ、而も內緒で許りでなく、公々然としてそれを言ふ。新聞紙の人の身の上に關する記事の無遠慮なることは、最もよく之を證明して居る。それで亦容易に他人の惡口を言ふ人は、他人から惡口を言はれても憤ることは出來ない、こんな人は、詰り、他を重んぜざるのみならず、又、己をも重んぜざる者と視なければならぬ。こんな習慣は、萬事會議で以て仕事を爲して行かうとする立憲政體には、最も不適當のものである。そこで、私は平生の主張として、自尊と他尊の竝行と云ふことを說いて居る。自尊の實は他尊に依りて行はれ、他尊の心は自尊より生ずるものである。

道理に屈服する良習慣

社會人智の進歩と共に、將來に於ては、世の中の議論を云ふものは益々烈しくなるもの、と覺悟せねばならぬ。議論の、而も根强い議論の多いのは、一面から見れば、確に文明の一表徵である。西洋は日本に比すれば、此根强い議論の多い點に於ては、遙に優つて居る。而して尙合議政治のよく行はれて弊害のないのは、西洋人には一つの長所がある。それは、彼等がよく理窟を言ふに拘はらず、又、よく道理に屈服する、卽ちよく他の意見を聽いて、之を客觀的に判斷すると云ふ習慣が出來て居ることである。日本人は性質が淡泊で、執念くないので、議論が少しく面倒になると、サルサイから大概にして置かう、と云やうなこともあるが、

これは道理に屈服したものとは言はれない。處が、西洋人は子供の時から、道理と云ふものを對人關係以上に置いて、之を尊重するやうに教育されて居る。即ち西洋の教育には、獨逸で言ふワールハイツリーベ、即ち愛眞心の養成と云ふことに餘程重きを置いてあるのである。之に反して、日本の教育では、人倫關係が德育の眼目になつて居るから、長者の言にはよく從ふ、と云ふが如き良い習慣もある代りに、同じ善いことを言つたとしても、その人の身分に依つて其の効力に大なる等差を付ける。それで、日本では、議論の勝敗迄が、何時も對人關係の支配を受けると云ふ始末になる。要するに、道理を道理として取扱ふと云ふ習慣が、未だ十分出來て居ないと思ふ。

三個のC

英國には三つのCと云ふ格言があつて、此格言が同國の議會政治の根本になつて居る。即ちコンテスト(討議)コンフエレンス(商議)コンプロマイズ(妥協)この三つの原語はいづれもCを以て始まるので、かう云ふのである。何か新しい問題が出ると、盛んに批評も、駁論もする。それから委員など設けて熟議を遂げる。かくて最後に至ると、反對意見の間に一致點を見出して、それに折合を附けるのである。而してこれが出來るには、その人に餘程の雅量がなければならぬ。前に言つた自尊他尊の心がなければならぬ。特に最も必要なるは、今申す道理に屈服すると云ふ精神である。飜然と自己の主張を抛つて、潔く道理に屈

服する、好しそれ迄に至らずとも、潔く多數の意見に從ふて、敢て愚痴を言はぬと云ふ覺悟がなければならぬ。元來合議と云ふものは、唯自己の意見を主張するが爲のみならず、兼ねて又他人の意見を聽かんが爲に必要なるものである。詰り、一人一個の意見は、如何に聰明の人でも、不完然であると云ふ前提の下に、此合議と云ふ制度の必要が起つたものである。古語に「人離して而して之を聽けば、則ち愚なり、合せて而して之を聽けば、則ち聖なり、書に曰く、庶言同じければ、則ち繹ぬ」とあるのは、則ち此合議の必要を說いたものである。合議しても結局折合附かねば、殘る所のものは矢張一人一個の言で、庶言同じと云ふ場合に至らぬから、右の如く特に之を繹ぬと云ふ價値もないのである。要するに、合議と云ふ制度は立憲政治の根本であるから、此政治に適する國民としては、先づ何よりも此合議に堪ゆる資格を具えなければならぬものと思ふ。

協力

西洋の共衆主義

是は英語で云ふコオペレーションを譯したものである。立憲政治では、何事も衆力衆智を集めて大成を期すのを以て、その眼目とするのである。政黨始め總ての事業は、いづれも團結の力で以てその成績を擧げねばならぬ。それで、此場合には、先づ國民に衆と共にすると云ふ精神、即ち共衆主義と云ふものが必要になつて來るのである。共衆主義は之を分てば、共樂主義と共苦主義とになるが、孰れにしても、衆と共に

して孤立獨行せぬことが必要である。然るに我國民は口には孟子の衆と共に樂むの愉快を說きながら、實際は餘り此共衆主義を好まぬやうである。それは、東西の日常生活を比較して見れば直ぐに分かる。西洋人は獨立自治を尊ぶが、併し、よく衆と共にする生活を好む。彼等は大人でも子供のやうである、小人數では寂しがつて、成る丈多くの人の集まる所を擇んで一緒になつて遊ぶのである。彼の國で公園や、飯屋や、凡て諸種の集會所の繁昌するのは、實に此一般の國民的性質に基くのである。之に反して、我國民は今以て四疊半式の生活を愛する、水入らずの仲間同志でなければ、眞の愉快は取れぬやうに感じて居るものが少くない。それで、とかく共衆主義の事業が發達しないかと思ふ。處が、――是は他の理由もあるが、――西洋では、今日は、此共衆主義を隨

分極端迄も擴充して行く試が流行つて居る。例へば、ドレスデン市にはフォルクスゲゼルリヒカイト、卽ち平民親睦會とでも名くべき一つの施設がある。全市七八個處に、簡便にしても廉價なる飯屋を設けて、こゝに成るべく富豪の人々も出入して、時々勞働者などと談話を交換する仕組である。是は私も實際に就て視察したが、詰り、貴賤、貧富の階級間の意志疏通の機關である。こんな鹽梅に、階級間にさへ相互の親睦を圖るのであるから、一般國民の間に身分に依つて互に反目する、と云ふ弊が段々と少くなる。その外、富豪や、貴顯の生活が總て共衆主義に依つて居る。英國の貴族の鄕里の邸宅などは、恰も大隈侯の邸宅と言つた風に、主人留守中は殆ど公開である。

日本の祭魚主義

然るに我國民の生活は、鼠が物を咬へて、自分の穴に引入れて置くやうに、總ての持物を、いつもその身の圍りに列べて置かねば氣が濟まぬ。尤とも鼠は引入れた物は皆喰べて了ふが、玆に獺と云ふ奴がある。是は又妙な性質のもので、喰べ切れもしない魚を澤山に貯へて、獨りで樂んで居ると云ふので、昔から支那では之を獺の祭魚と言つて居る。我國の富豪には往々此祭魚をやつて居るものも多いやうである。それで、私は嘗て「生活及社會觀」と云ふ一書を作り、その中に、日本人の共樂生活を好まぬ一證として土藏の存在を擧げて、土藏は利己主義、個人主義、否、此祭魚主義の表徵である、約言すれば、共樂主義の行はれない證據である、と云ふ意味を述べて置いた。一體がこんな性質の國民であるから、どうも、一致協力で以て事業を經營することが下手で、今以て一騎打ちの拔駈け功名で以て、萬一を僥倖しやうと云ふ風が盛んである。その結果として各事業に就て鞏固なる團體が起らないのである。

不正競爭

又、各團體間の共同作用が起らぬ。隨つて又、個人の利害を平均して、共通の利益を收むると云ふ工夫を怠り、徒に不正競爭を爲して自他共に損害を受けて居る。長短相補ひ、貧富相助くるのは、如何に競爭激烈の社會に於ても必ず行はれ得ることである、否、行はねばならぬことである。小資本家も互に協心戮力すれば大資本家と對立することを得

る。又大資本家も勞働者と公平に利益を分てば、勞力を金錢と結付けて、之を一種の資本に變ずることが出來る。此場合に於ては、勞働者は金錢の代りにその勞力を提供して、之に依つて一種の資本家となるのである。此理想は、私の知る限りでは、彼の獨逸エーナ市のカール・ツァイス會社（顯微鏡等各眼鏡類の大製造所）が、その創立者の一人たるアッベの遺志を奉じて、實現せんと試みて居る所である。かくの如く、最も氷炭相容れぬやうに思はれて居る、資本家と勞働者との間にて於てさへ、相當に工夫し、又熱心に努力すれば、共同一致の實を擧ぐることが出來る者である。況して同一事業の間に於ては、少しく平意虛心で以て相互の利害を考慮すれば、少くも不正競爭を爲して、徒に資本を浪費するが如き弊害は、之を一掃し難い事ではないと思ふ。併し、其處迄に至るには、先以てその國民の間に、此共衆主義が勢力を得ねばならぬ。詳しく言へば、個人相互に、又團體相互に、共に相依り、相輔けて始めて、各自その共通の目的を達し得る、と云ふ覺悟が起らねばならぬ。

萬事に割據孤立す

以上は、社會萬般の事業に必要なことであるが、之を地方公共團體に就て見ても、亦固より同樣である。例へば、是は公共團體の直接の仕事ではないが、彼の產業組合などの如きは、殊に此精神がなければ、決して良い成績を擧げることは出來ない。その外農事の改良でも、山林の經營でも、蠶業の進步でも、又或は此頃の問題になつてゐる米價調節に關する方法でも、悉く此精神が本になつて、始めて甘く解決せらるゝ問題

であると思ふ。加之公共團體の事業が動もすると偏向して、互にその間の調和を失ふが如きも、亦主として此精神の缺亡に基くものである。勸業は勸業として土木は土木として、衛生は衛生として、教育は教育として、各別々に割據孤立して行はれて居る、と云ふ例は幾らもある。私共の同志で平生唱へて居る、道德經濟の調和とか、產業教育の提携とか云ふ見地から見ると、どうも未だ非常に遺憾な事が多い。例へば、茲に一線の道路を開くとしても、その理由は、大概唯交通の便を進めると云ふ位なもので、經濟上の調査などは一向出來て居ない。文化を高める爲だなど云ふ人もあるが、實際の處道路が開けて始めて這入つて來るのは、田舍稼の藝人位なものである。人力車に乘るものが多いので、農民の脚が弱くなつたのが、唯一の獲物であつたなどゝ云ふ笑話もある。

その外の事業でも、皆事業と事業との間に聯絡を缺いて居るのみならず、同一の事業でさへ、統一を得て居ないのである。加之知事にも、土木知事とか、勸業知事とか、教育知事とか言はれて、專門の知事がある。郡長以下にも、同じくそんな名稱がある。是等は實に最もよく事業不統一の傾向を表はしたものであらうと思ふ。要するに、我國民は共同協力、卽ちコオペレーションと云ふことには未だ十分に慣れて居ないのは事實だから、今から特に此精神の養成に努めねばならぬのである。

殉公

殉公東西自治觀念の懸隔

此精神の養成も、亦固より大に必要である。併し、唯殉公と言つても

その目的が漠然として不明である。そこで、此精神を喚起するには、市町村その物、就中その目的を知ることが先以て必要である。市町村の名譽、利益、權利、是がよく保全され、又、よく增進されるのが、則ちその市町村の發達である。向上である。一家の名譽を揚げ、その繁榮を圖るには、どうすれば可いか、と云ふことは誰にもよく解つて居る。誰にでも家族觀念と云ふものは存じて居る。又、今日では國民の國家觀念も既に相當に養成されて居る。忠君愛國の如きは、とにかく三尺の童子も之を口にする迄になつて居る。然るに家族と國家との中間に位する公共團體に關する觀念に至つては、存外、我國民に缺乏して居る。少くも西洋人に較べては、さう言はざるを得ないのである。是は多分我國に於ては、國家は家族に基き、家族が發展して國家となつた、と云ふ特別の歷史に原因するのであらうと思ふ。西洋では、地方團體が勢力を得て、漸次に國家を成したものが多い。他から追々と流れ込んで來て部落を爲し、其の中の有力なるものが、他を併呑し、又は他と聯合して、今日の如く大小の國家を作つたものである。それで我國では愛國心は家族心を本とするに反して、西洋では愛國心は部落心、卽ち愛鄕心に基く、と云ふ結果を生じたものらしいのである。加之、西洋ではかゝる沿革に基いて、久しい以前から舊の部落を範圍としたる自治制が自然に行はれて來たものである。否、今日でも其の實一都市に過ぎない者で、其の權限上では一個獨立の國家であるものも少くない。獨逸のハンブルグ、ブレーメン、リュベックの如きは其の例で、こんな處では、其の國民の公共團體に關する觀念が、自然發達して居るのも無理はないと思ふ。

我國民の自治に慣れざる所以

我國でも、封建時代の舊藩は一種の獨立國であつたが、今日の意味の自治體ではなかつた。其の士分丈は藩主より幾分禮遇を受けて居たが、これとて士分の權利として與へられたのではない。生殺與奪の權は全く藩主一人の手に握つて居た。一般人民は、所謂由らしむべく、知らしむべからざるの民であつたのである。處が、廢藩置縣となつてから、市町村制や府縣郡制の施行となつたが、其の際に定められた行政區域と云ふものは、頗る舊來の關係を無視したものであつた。そこで、今日でこそ此行政區域を以て各自の鄕里だと云ふ觀念も多少は出來たが、當時は唯お役所の便宜の爲に設けられた繩張位に見て居たのであ

る。況して從來から國民には自治と云ふことに就ての知識も、理解もなかつたら、折角出來た自治制も形骸丈具はつて、未だ少しも魂は這込つて居なかつたのである。而して私は是が則ち我國民が今以て案外自己の市町村に――府縣郡に對しては言ふ迄もない――對して冷淡なる所以であると思ふ。

先覺者の奉公心

然らば差當り此公共團體に對する殉公獻身の精神を養成するには、どうすれば可いかと云ふに、是は其の根本に於ては、一般義務心の養成に在ることは勿論であるが其の外に、住民をして其の市町村は恰も自己め家族の如くに、自己と直接の利害關係を有するものなることを知

らしめるを要する。何物に對しても人は知つて後に始めて之を愛するものである。又此愛は自己と交渉深き物に對して最も強いものである。で、先づ此普通の事理に考へて、住民の其の市町村に關する知見を擴むる必要がある。而して又其の土地の先覺者等が自ら進んで此殉公獻身の模範を示すが如きも亦最も有効なる此精神の教育法で、ある。先づ消極的に言へば、政治上の黨爭などを此處に持込まぬことである。相撲は土俵の上の事で、座敷で取るべきものでない。座敷で取れば疊建具を壞はすに極つて居る。亂暴狼藉な政爭の渦中に、平穩無事の僻村迄を捲込むのは、實に罪作りの甚いものである。若し有力者の間に激烈なる政治上の恩怨を忘れて、互に提携して土地の爲に盡す、と云ふ美風が起れば、一般の住民も必ず之に感化されて、一村の公事の

爲には、各自の利害を顧みざるに至るであらうと思ふ。

殉公心と名譽職の活動

更に積極的に言へば、名譽職の事である。日本では名譽職はどうも甘く行かぬ。名譽職とは職務に伴ふ俸給を受けずして、之に伴ふ名譽丈を受けて、一定の任務に從事する役目と云ふことであらう。それで、若し大きな人物が之に從事すると、其の人は之が爲に少しも其の一身上の名譽を增さない。若し增すことがあれば、それは其の職務が增すのでなく、其の人の殉公獻身の精神が增すのである。市町村長などになつたが爲に、始めて名譽の人となるやうな者は、根は餘り偉い人物ではないと視ねばならぬ。そこで、私は法文の意味などは如何にもあれ、

名譽職を有效にするには、職務から名譽を與へて貰ふやうな人でなく、却て職務に向つて名譽を與へて遣る、と云ふやうな人物がそれに從事して、茲に始めて名譽職が眞の名譽職となると思ふ。それに付ては、又、殊に先覺者に、此殉公獻身の精神あることが最も必要になつて來る。處が、日本では未だこんな人物が自ら進んで名譽職に就く、と云ふ氣風が一般に起らないのである。

西洋の實例

然るに西洋には、其の例が隨分多い。三十餘年程以前に死んだ獨逸のウィルヒョウと云ふ醫學者は世界の學界で誰知らぬものはない碩學であつて、同時に又、政治家として一黨を率ゐて、盛んにビスマークの

政策を攻擊したものであるが、此人は伯林市の市會議員を四十年間も忠實に務めて、非常に市の爲に貢獻する所があつた。それで、ウィルヒョウの八十四の誕生日に、伯林市では其の功績を永遠に記念する爲に、ウィルヒョウ病院と云ふ世界的模範病院を建てたのである。ウィルヒョウは其の醫學者として、又、政治家としての生活以外に於て、唯一個の公民として、專心一意、其の都市の爲に盡瘁したのである。其の外、英國の統一黨の首領であつたチャンバーレンがバーミングハムの市長として、又、米國大統領のルーズベルトがオイスターベーに歸つて、共に其の繁劇なる政治的生活以外に超越して、地方の爲に少からず盡力したと云ふ例の如きは、世上によく知られて居る所である。

日本の實例

茲に喜ぶべきは、此美風は今日では追々と我國にも行はれて來たことである。加納子爵の千葉縣長生郡一宮町長としての治績は、今は世に隱れもない事である。又是は直接地方の行政には關係ないことであるが、筑後の立花伯爵越前の松平子爵は各其の鄕里に於て農事改良等の事に盡力されて居る。其の外、毛利、島津の兩公爵も、亦其の鄕里を本據として殖産興業に努められて居る。尤も此例は、西洋には非常に多い。西洋では、殆ど總ての國で貴族などは皆所謂土着で、其處に本據を構へて、色々公益の爲に事業を營んで居る者が多い。日本のやうに華族の多數が首府に集つて、ぶら〳〵してる所は見當らないやうであ

る。こんな事情からして、概して言ふと、我國に於ける名譽職の成績は餘り可くない。中には不名譽職になつて居る事實も往々にしてある。

伊國自治體の紊亂

併し、私は茲に名譽職の利害を論ずる積りではない。市町村の役員は、悉く名譽職にして、それで成績が擧がれば、これこそ理想通りの事であるが、都市の行政の如きになると、却々複雜を極めて居るから、一定の素養ある者でなければ、市長などはとても務まらない。それで、獨逸の如きは概して之を有給にして、廣く適材を求めることにして居る。之に反して、英國は名譽職を原則として、倫敦市長の如きは、少くも其の一年の任期中に二十萬圓と云ふ大金を持出すと云ふ事である。而して

其の報酬としては、唯退職後に市役所に肖像畫を掲げて貰ふ位のものである。何を言つても、自治行政は矢張り英國を以てイの一番に數へねばならぬ。以上の外、西洋に於ける名譽職の有效に行はれて居る話は、斯道の先覺者たる水野博士や、井上博士の著に澤山出て居る。それから、是は私が少し研究して見たことであるが、伊太利は全く英國に學んで自治制を定めて、名譽職を原則として居るが、其の結果はいづれかと言へば、寧ろよく我國に似て惡い。此國では政治上に勢力を得んと欲すれば、先づ地方行政を其の手に握らねばならぬので、此意味からして地方の役員や、議員の選擧を烈しく競爭する。而して此競爭に勝つのはいつも政府黨である。勝つた方では隨分反對者を苦しめる。又、何等かの事業を起すに當つては、ドー・ウト・ディス卽ち貰ふ爲に與ふ政

治と言つて、互に利益交換をするのが常である。又、伊太利人は妙に地方根性に富んで居る。自己の鄕里の勢力を他鄕人に占めらるゝことを甚しく嫌ふ。チェーザルが言つた、羅馬で第二人になるよりも、寧ろ自分の鄕里で第一人になりたい」と云ふ言葉は、世間ではよく之を鷄口牛後の意味に取つて居るが、其の實はさうでなく、全く前述の如く鄕里に於て威張ることを切望する、彼の國一般の民情を言ひ表はしたものである。而も此考は今も尙多數國民の頭を支配して居る。それで、大政治家でも常にその鄕里に於ける勢力を失ふことを恐れて居る。而己ならず、代議士などゝして中央に打つて出るのも、さうして置けば、他日自己の鄕里に歸つて後、市町村長位には必ずなれると云ふ貫目が附くからだと言はれて居る。これは、一方から見れば甚だ立派な心懸の

やうであるが、併し、又、彼等は元來、政治と行政とを區別し得ないのであるから、其の結果は前に言ふやうに、何時も自治行政迄も政爭の渦中に投ずることを憚らぬのである。勿論、是が唯一の原因ではあるまいが、伊太利の市町村は日本よりも多い負債を有つて、中には破産に瀕するものもあると云ふことで、政府は之が爲に其の消却に關する方法に苦心して居る。其の外、此國の地方行政を調べて見ると、其の惡い處が如何にもよく我國に似て居る。伊太利統一の創業者たるカヴォールは、「吾々は今や伊太利國を作つたが、吾々は是からは伊太利人を作ることを考へねばならぬ」と言つたさうだが、成るほどさうである。自治制の如きも英國を學んで、其の形式丈は備はつたが、少しも其の精神が出來て居ない。日本でも獨逸を學んで市町村制を布いて見ても、どうも、それが十分甘く行かぬのは、是も矢張り其の形丈が備はつて居ても、未だ其の魂が出來て居ないからである。それに付ても、此魂の一たるべき殉公獻身の精神を十分に養成することは、蓋し目下の最大急務であらうと思ふ。

組織

組織は獨逸の特長なり

私は前に自治、互尊、協力、殉公等の諸精神を數へ上げて、其の必要を說いたが、更に其の以外、否、其以上に必要なる一種の能力がある。それは何かと云ふと、組織的精神である。以上の精神卽ち能力は、悉く必要なるに相違ないが、それが各自單獨に働いては餘り役に立たぬ。否、さう

すると、動もすれば極端に流れて、或は利己に、或は偶合に、或は事大に、又或は自屈に陷ると云ふことになる。それで、此諸種の能力を聯絡し、統一して、是より更に大なる一種の能力を作り出さねばならぬ。戰術に於ては歩、騎、砲、工等の各兵科を集めて、而も其の各自の獨立を害することなく、之を一定の作戰上の目的に供するのであるが、此戰術に等しき一種の總合的能力が、其の他の事業にも必要である。獨逸では之を名けて組織能力と言つて居る。獨逸人は或は世間で思ふやうに決して從順一方の者でない。隨分「我」の强い個人主義の人間である。が、併し、又よく此「我」を殺して他の命令にも從ふ。獨逸人に言はすると、此他の命令に從ふのは、其の必要を認めて自ら進んで從ふのであつて、他から無理に從はせらるゝのではない、と說くのである。それは何れにしても、獨逸人は確かに此積極消極の兩性質を具えて居る。それから又、彼は只他の命令に從ふのみならず、自己を巧に衆人との關係に置くこと、卽ち衆と共に團體を作りて、且其の中に甘く自己を編入することが頗る其の長所とする所である。加之此團體が又之を組織する個人に同じく、前の積極消極の兩性質を具えて、個人と同樣の働を他の團體に對して爲すのである。團體としての獨立を保ちながら、他の團體と聯合し、又は他のより大なる團體に這入つて、巧に其の一部となるのである。それで、獨逸の政治的、社會的各方面の生活を通覽すると、到る處團體だらけで、丁度多島海と言つた風に見えるのである。尤も團體の多いのは獨逸許りでなく、文明各國は皆然りであるが、獨逸のそれには相互の間に脈絡があり、系統があつて、而もそれが結局は一の最も高い目的の

爲に働いて居る。獨逸人自らは此狀態を評して、獨逸は此點に於て立派な一個完全な有機體になつて、其の各機關は互に相依り、相扶けて以て獨逸の全生活を維持して居ると云ふのである。尤も實際はかう口で形容して言ふ程に整頓しても居らぬが、併し、之を他の諸國と比較して見れば、或は獨逸人の言ふやうなものになるかも知れぬ。

組織は能率增進の方法

同じ列强の中にでも、國に依りては胃が二つあつたり、脚が三本あつたり、血液の廻はりの惡い處や、神經の麻痺して居る處もある。而して是は必しも其の國の文化が後れて居るからでもなく、國民がこんな事に頓着せぬからである。或は頓着しても出來ないからである。米國

の如き山林原野に尙開拓すべき多くの餘地を存し、起すべき事業の無限である處では、未だ事業整頓と云ふことの必要を見ないが、此處でさへ、近年は頻りに能率增進と云ふことが盛んに唱へられて居る。人間の能力を如何にして最も十分に發揮せしめ、又如何にして成るべく人力を少くして、成るべく多くの効果を收め得べきかを研究して、之を着々商店や、工場に應用して居る。是は同國に於ける勞銀の法外に高い結果、器械の力を以て之を補はんとしても、全然人力を省くことが出來ないので、遂にこんな事を考へ出すに至つたものである。然るに獨逸の如きは四境は敵に圍まれて、人口の增殖する割合には領土は擴張せぬ。擴張しやうとしても、好い土地は大概既に他國に先鞭を着けられて居るから、どうしても他の方法を考へて、自己及び自國の發展を助け

て行かねばならぬ。そこで、此處では節儉とか、集約とか、利用とか、發明發見とか云ふ方面に向つて、其の全力を注ぐの必要が起つて來たのである。前の組織と云ふことも、畢竟は人間の能力を最も無駄を少くして、最も有効に使用する方法に外ならぬのである。要するに、獨逸人の組織能力と云ふものは、固より其の國民性にも因らうが、それを今日のごとくに大成したのは、全く其の境遇の然らしめたものと視るのが穩當であると思ふ。而して此事は、世界の舞臺に於ては比較的後進の獨逸をして、今日の強大を致さしめた有力なる原因になつて居るのである。

組織は特に我國に必要なり

然らばこれは獨逸の如き國柄に限つて必要なことであるかと云ふに、決して然らず、英國の如き宏大無邊の領土を有する國に於ても、將來は、矢張り此組織と云ふ事に注意するに至るであらうと思ふ。現に戰爭以前に於て、既に英國の商工業は動もすれば此獨逸の組織能力の爲に少らず惱されて居たのである。英國の領土の內にさへ、獨逸人は此能力に依りて其の地盤を開拓しつゝあつたのである。海外殖民地の經營に於ても、獨逸人は每に此能力に依つて模範的施設をなして、流石の英人をして、之には感嘆を發せしめて居たのである。我國の如きは人口の割合には領土は狹く、さらばと言つて、急に領土を擴張することも出來ないから、矢張り其の事業は萬事組織的にやつて行かねばならぬと思ふ。英國のやうな鷹揚な態度を學ぶのは、所謂鵜の眞似をする

鵜である。況んや又元來此組織と云ふことに極めて不慣の國民である以上は、此點に於ては、別けてよく考慮を廻らさねばならぬことゝ思ふ。小我を捨てゝ大我に就く、と云ふ見識と雅量とがなければ、大事は出來ぬ。就中、自治制の如き、初めから住民の和衷協力を豫期して、制定せられる公共團體に於ては、其の成績の如何は、主として此能力の多少に關することは言ふ迄もなからうと思ふ。

公民精神の養成法

公民精神は知識のみにあらず

以上の如く、先づ市町村公民の精神的資格とも見るべきものを列擧して見れば、獨立、互尊、協力、殉公、及び組織と云ふことになるであらうと

思ふ。此諸能力がよく住民の多數に備はる以上は、如何なる市町村と雖、早晩必ず勃興するに相違ない。獨り市町村許りでなく、郡、府縣も亦さうである。否、國家發展の基礎も亦實に此處にある。市町村に對する法規的指導や、監督も固より必要であるが、斯くの如きは形式の整頓に止まりて、精神迄を改造することは出來ない。精神から改造せんと欲すれば、是非とも以上の諸能力の陶冶に向つて、今一層の盡力を要する。而して其の最有力の手段としては、前に言つた通り、私は先づ所謂公民教育を推したいのである。公民教育に關する思想は學者に依つて尙多少の相違あるも、要するに、公民たる精神的資格を、教授（知識）と訓練（實行）との兩方面よりして陶冶せんとするのである。教授に依る方法は、第一は法制經濟に關する知識を授くることで、是は既に我國に於

ても不完全ながらも採用されて居る所である。但し、東西共に其の教科書の編纂には頗る困つて居る。嘗てエーリングが「哲學者の如く考へ、百姓の如く話さねばならぬ」と言つた如く、元來、難かしいことを解かり易く言ひ表はすことは、却々困難である。それで、特に我國に於ては今日の處未だ好い法制經濟の教科書が出來て居ない。又、其の上に適當な教員も居ない。併し、たとへ好い教科書や教員が出來ても、唯知識を授くる許りでは、公民資格の養成は望まれない。公民資格は知識でなく精神でなければならぬ、品性でなければならぬ、實行でなければならぬ。知識のみでは、動もすると却て潜り魂性を養成する結果になる。前述の如き諸精神は、決して一知半解の法律經濟の知識に基くものでない。

見學は聽講に優る

但し、同じ知識でも、實物教授に依つて獲られたものであると、其の影響が併せて感情意志にも及んで、精神的に感化すると云ふ効果がある。例へば、市町村の組織や、機能を實地に就て見學することは、之を市制町村制の講義を聽くに比すれば、其の効力が遙に多い。此場合には知識も得らるゝのみならず、市町村に對する親みも、同情も生じて來る。其の仕事は一として住民の利害に關係なきものはない次第を領會すると、之に對して自然に注意を拂ふやうになる。市制町村制の條文を讀んだのみでは、恰も解剖書を見る如きもので、構造丈は解つても、親しく人間の生活に接することが出來ぬ。鬼の死骸でなくても死骸であれ

ば、人間のものでさへ之を見て決して好い感じはせぬものである。總て法律の條文の講義程聽いて面白くないのは、それが何かの死骸であるからである。又、凡そ講義となると、色々の法理など云ふものが引合ひに出て、元來、くだらぬ事迄が、却々面倒になるものである。處が、之を實地に就て見ると、左程に解かり難いこともない。是は銀行會社などの學問にしてもさうである。爲替論などは書物の上で研究すると、頗る込入つたものであつて、一寸呑込み惡いが、さて、少しく實地に從事して見れば、常識丈でも相當にやつてゆける。で、此點から見ても、市町村の實地見學と云ふことは極めて必要だと思ふ。

瑞西、丁抹の農民の政治思想

現に瑞西では、學校生徒をして時々町村役場や、其の議會などを參觀せしめて居る。而して此國程、國民一般に政治的知識の普及して居る所はない、と言はれて居る。僻村の農民の夜々團欒の茶飲話にも、時の村會の議事などを話題として、某の議案はどう云ふ意味のもので、之に對して、田吾作君は如何なる點に於て反對し、芋兵衛君はどう云ふ理由で賛成した、とか云ふことを話合つて、互に興がると云ふことである。それで、此國の人民は、我所謂水呑百姓に比すべき者に至る迄、何時でも村會議員位にはなれる準備が出來て居る。或書物に、此國の村會議員の辯論を評して、獨逸や佛國の辯護士も及ばぬ程、よく徹底して、且立派なものであると言つてある。瑞西に似て農民の政治思想の進歩して居るのは丁抹である。此處では、彼の平民高等學校と云ふものが普及

して居る結果、農民の教育が非常に進歩して居る。國會以下、各種の議會は殆ど農民の天下である。而も此農民の教育が人格陶冶を主とするので、議員などの人物が概して好い。着實で、公正であつて、議員を商買にする者などは少しもない。こんな風に、一般の住民が政治思想――と云へばちと大業だが、とにかく政治思想に相違ない、――に富んで、少くも其の所屬の市町村の仕事を領會して居れば、自然之に對して興味を生じ、之を我物の如くに大事にする樣になる。而已ならず、さうなると、容易く一部の野心家などの口車に乘せられることもない。今日の如く自治行政迄も、動もすれば政爭の禍中に投ぜられるのは、政黨も惡いが、畢竟は、其の住民に自治體に關する知識と、同情とが缺乏して居るからである。

市町村役場は九省の縮圖　英國の政治家

市町村の行政と言へば、誠に詰らぬ些事で、國家の經綸とは何等の關係ないやうに思ふ人もあるが、實は國家行政の基礎は此處にある。中央八省の行政は悉く此處に凝集されて居る。三家村里の小役場と雖、必ず八省の行政の一部を處理して居る。其の事務は九省のそれの小いさい物である。其の組織は九省を集めて之を縮小したものである。又、事務の取扱方が、本省のそれに異なる所はない。規模こそ小いさいが、性質は同樣である。村會と云へば、往々、ポンチの材料になる程であるが、併し、其の組織と云ひ、其の議事と云ひ、根本原理に於ては、何等帝國議會に異なる所はないものである。議案の調製でも亦然りである。

それで、能く村會議員が務まれば、又、郡府縣會議員は勿論、衆議院議員でも務まる。初期の帝國議會に衆議院議員に選出されたものは、多くは所謂在野政治家の豪傑連であつたので、肝腎な豫算案に對して削減を加へんと欲しても、齒が立たなかつた。その時、一人無名の議員であつて能く意見を立てゝ同僚の注意を惹いた者がある。後にて聞けば、其の人は嘗て某縣で郡書記を務めた經歷があつて、豫算の切盛りは全く其の頃に覺えたもの、と云ふことが分つた。こんなもので、地方行政の經驗は、國家の政治を議する上にも非常に大なる効果あるものである。下手な憲法論などの講釋を聽くよりも、郡役所や、町村役場の書記にでもなつて、實地の研究をするのが、政治家の實際的手腕を作るには、却て捷徑であるかと思ふ。英國の政治家が政黨出身者たるに拘はらず、案

外よく事務にも通ずるのは、彼の國の習慣として、將來政治家たらんと欲する者は、大學卒業の後、地方の行政や、司法――所謂治安判事として――の實地事務を練習して、それから中央政界に出て、政治の呼吸を俱樂部、其の他の交際場裡に於て學ぶからである。日本の政治家の如く文筆口舌の經驗許りでそれになる、と云ふ例は少い。尤も、獨佛の議員にはこれが多い。併し、多分其の爲であらう。此兩國の議院の議論には、とかく空論が多い。獨逸で政黨内閣の出來ないのは、其の制度の然らしむる所ではあるが、議員に眞の政治家の少いのも、少くも政黨内閣の出現を遲くする一原因だらうと思ふ。此國の政黨は多くは其の所屬階級の代表者であつて、隨つて大處高處より國民を指導する經綸家らしい人物が少いやうである。政治は固より事務のみではないが、さ

らばと言つて、全く事務を知らんでは、眞の政治家にはなれない。而して前の如き地方行政の實地研究は、此事務を知るには一番簡便の方法である。

學校訓練に由る公民精神の養成　米國の例

右の如く、此實地研究は机上の勉學に勝ることは言ふ迄もないが、併し、これ丈にて前述の公民の資格として必要なる諸精神を養成することは、固より不可能である。此諸精神は唯知識の上から許りでなく、實行の上から、而も一種の訓練に依つて、其の陶冶を圖らねばならぬ。其の方法として、今日は西洋でも色々の工夫が凝らされて居る。例へば米國當りから流行り出したスクール・シティ、即ち學校自治體と云ふやうなものは、即ち其の一例である。是は學校を自治體に擬して、教場以外の生活に於ては、生徒をして公民としての練習を爲さしむるものである。生徒の團體を自治體とし、生徒を其の公民として、恰も自治體と同じ仕事を爲さしむるのである。會長役員議員の選擧は勿論、豫算や、條例に就ての會議もある。尙其の外に、或程度迄の犯罪者に對する陪審裁判もあるのと云ふ風で、其の國の自治體其のまゝ事をやらせるのである。これは、我國の中等學校などにも其の例少からぬことであるが、西洋のスクール・シティに於けるが如くに眞面目に行はれて居ない、否、少くも明確なる目的を以て爲されて居ない。此外に、米國にはジュニオル・レパブリック、即ち少年共和國と云ふものがある。是は前者より一層大規模のもので、學校を中心として一村を作り、之を一國と視做

して、其の中で、生徒をして公民としての生活を爲さしむるのである。詳しきことは、菊池博士の「日米教育時言」と云ふ書物、其の他にも述べてある。

獨逸等の例

獨逸瑞西其の他でも、近來は此スクール・シティに倣つて、シュールゲマインデ（スクール・シの譯）と稱する中學校などが、追々と設けられて居る。それは多く田舍にあつて、此處で、農事、其の外色々の實地の仕事をやらせて、是で以て公民の資格を養成せんとする工夫がなされて居る。こんな學校では、固よりビュルガークンデ、卽ち公民須知などゝ名けて、法制經濟の大要を授けるのであるが、之と並行して、又、右の如く實地の仕

事の上で以て、公民の精神的資格の養成を務むるのである。それから又、ケルシェンシュタイナーなどの唱ふる勤勞學校と云ふものに至つては、明に勤勞教育に依つて此公民の資格を陶冶せんことを主張するのである。因つて、私は之を次に論ずる積りであるが、其の前に尙一言したいのは、前述の如き公民教育は、之を小學校に施すには尙早きに過ぎるが、此青年團の時期になれば、青年は既に多少實際生活に觸れ、且其の仕事の上に於て、市町村の公益の何物たるかを經驗して居るのであるから、此教育を此時期に於て施すは、最も適切の事と思ふのである。補習教育に於て一通りの理論を授けて、之を實地の執務、議事等の參觀に依つて證明し、尙其の上に、其の團體生活を利用して、之に關する訓練を施したならば、青年は必ずよく市町村を領會して、相當に公民たるの

資格を具ふるに至らうと思ふ。

勤勞教育

勤勞と經濟　我國の長袖生活

勤勞教育、是は近來其の聲が頗る高い。私も久しき以前から之を主張して、詳しい意見は、「公民及勤勞教育論」と云ふ拙者に述べて置いた。勤勞と云ふ言葉は英語のレーボール、獨逸語のアルバイトの譯語で、經濟上では極めて重要の關係を有するものである。其の意味を稍〻學術的に言へば、人間の意志の體的表現であつて、而もそれが意識的に爲され、且或價値を生ずるものである。即ち或價値を生ずる人間の意識的

意志の體的表現である。それで、是が原料、資本と並立して、經濟上の三大要素の一となるのである。世間には資本のみに依つて生活して、少しも勤勞を要せぬ人もある、所謂富豪の徒は即ち夫れである。併し、大多數の者は勤勞に依つて始めて其の生計の途を得るのである。況んや、坐して喰へば山をも空しで、豊富の資本を擁するものと雖、遂には勤勞の必要に逼まらるゝことも少くない。勤勞は先づ此點から見て人生必須のものである。今日は器械の發明に依つて人力を補ふこと尠からざるも、尙且全く勤勞を缺くと云ふ場合には至らぬ。勤勞は依然として經濟發展の一大動力たることを失はぬ。「稼ぐに追附く貧乏なし」とは、今も昔も變りなき格言である。一國の上から見ても、勤勞を愛する國民は其の國を興し、然らざる國民は之を亡ぼすこと、是亦東西古

今に通じて謬らざる事實である。歐米諸國の今日の强大を致したのは、決して學術技藝の進歩のみに基くのでない。其の國民の上下が擧つて勤勞を好み、又之を尊重するからである。人皆各自の勤勞を以て一身一家を維持し、遺産扶助などの如き他力に依賴せぬ、と云ふことを以て原則として居るからである。而して我國民は此點に於て幾多の缺陷を有つて居る。戊申詔書は到る處に捧讀せらるゝも、我國民は未だ決して勤勉の民、努力の民とは謂はれない。食はず貧樂の人も、寢て居て果報を待つ人も、却々に少くはない。長袖生活、拱手生活、坐食生活、是が未だ多數國民就中、青年羨慕の目的になつて居る。

勤勞と生理

更に經濟上の意味を離れて、只行爲、又は實行としての勤勞の必要を論ずれば、勤勞は又人間生理の必須條件である、其の生きて行く上に於て、既に食物財貨と共に缺くべからざるものである。人間の身體は總て働くべく出來て居る。働かない部分は漸次退化して、何の用を爲さゞるに至るものである、只働くことに依つて心身共に發達する。それで、例へば、病身でない青年に一切の運動を禁ずれば、元氣忽ち消磨して、遂には死んで了ふ。人間は勤勞に生きて安逸に死する、地獄必しも地獄ならず、極樂必しも極樂ならず、却てビズイ・ライフ則ちハッピー・ライフである。安逸は一種の去勢術である。元氣餘つて始末に困る者に對する治療の妙藥は、此安逸に優るものはない。それで、昔から英雄は往々にして此妙藥を用ひて、配下の反噬を免れ、又免れんと企てたもの

である。清の康熙帝は康熙字典を始め、幾多の大著述を爲さしめた有名な文學保護者であるが、或肉皮家は、是は學者と云ふ者が民間に在つて、色々理窟を言つて人民を惑はすから、帝は之を朝廷に羅致して十分に優遇し、編纂と云ふ平和的事業に從事さして、以て彼等の元氣を消耗せん、と企てものであると言つて居る。學者の優遇と云ふことは誠に結構な事であるが、併し、それが過ぎるか、又は誤ると、却て學問の衰頽を來すこともある。獨逸の大學教授などが漸次御用學者風を帶びて來たのも、一は此優遇の結果であると云ふ人もある。「詩は窮して後に巧なり」と云ふ語もある通り、學者も餘り金が出來ると、面倒な研究などせぬものである。否、少くも是が一面に現はるゝ事實である。それから又、我國では豐太閤なども多少此手を行つて居る。茶會などを盛んに

したのは、當時の荒くれ男の氣を和らぐると云ふ意味も含んで居た。徳川氏になつても矢張り此遺意を奉じて、武士に學問文藝を奬勵することを始め、繁文縟禮を尚び、殿中に長袴を着けさせるなど云ふが如き、いづれも一種の軟化策であつた。かくの如くにして、幸に幕府三百年の泰平を維持し得たが、併し、之が爲に江戸の士氣は衰へた、個人に誓へて言へば、身體が衰弱して了つた。此事は殆ど自明に近い道理であるのに、とかく尚安逸を以て人生の最後に達すべき理想と心得て居る者の多いのは不思議である。私の舊藩主の鍋島閑叟は「自戒宴安如鴆毒」從來治國要勤儉」と云ふ詩を作つて居る位で、大に勤勞主義を鼓吹した名君である。多分其の爲であらう、本人も立身し、其の治下の佐賀藩も比較的多くの人物を出して居る。此外昔の歴史などにも、よく敵國の王

様に美人などを送つて、歡樂に耽らして置いて、後で之を討滅したと云ふ話が出て居るが、之を見ると、宴安は眞に鴆毒の如しである。併し、道理はさうであつても、人が勤勞を以て苦しいものである、卑しいものである、と信じて居る間は、到底、勤勞の美風は起らぬ。それで、茲に先以て必要なることは、從來の道德觀念に就ても多少の斟酌を加ふることである。今日のやうに道德と云へば、只人倫關係の事に過ぎざるものゝ如くに敎へては駄目である。モット突込んで、深く人間の意志を其の根柢からして活動さするやうに努めねばならぬと思ふ。

勤勞と學術

人間の頭は働かせないと鈍る樣に、人間の體も働かせないと弱るものである。それで、勤勞夫れ自身が既に人間に滿足を與へ、又愉快を與へて、之が發展を助くるものである。無事に苦びとか、無聊で困るとか云ふのは、則ち其の反面の消息を傳ふるものに外ならぬと思ふ。加之、頭の仕事でも肢體の仕事と並行せぬと、十分に成績の擧らぬ場合もある。特に今日の學術に於ては、どうしても頭と共に肢體を働かせねば出來ぬものが多い。實驗を主とする理科の如きは最もさうであるが、文科に屬するものでも、中には多少肢體を働かせねば出來ぬものも多い。歷史などは盛んに資料の採訪に努めなければ、新しい發見は望まれない。野史の著者飯田邦彥は數年間二階を下らなかつた、と言はれて居るが、今日では斯く故紙堆裏に沒頭して居るのみでは、碌な仕事は出來ない。古社寺、古建築、古書畫等の研究もせねばならぬ。よく此

頃は「今の新聞は手で書くよりも、寧ろ脚で書く」と云ふが、歴史でもさう云ふ風になつて來た。探險的旅行家などから續々と新しい發見が提供されて、書齋的歴史家の方は一向振はない、と云ふ傾向が東西に於て一樣に認めらるゝのである。其の他の學術、例へば、心理學でも其の實驗的のものになると、同じくさうである。肢體の働き、就中、手の働きが伴はんでは何事も出來ない。沈思默考も必要だが、それ許りでは行かない。そこで、シルラーは「只觀察する丈では何等得る所はない、何か大事を成さんと欲すれば、深く蹈込み、鋭く甄別し、多方面に結び附け、根氣善く持續するを要す」と言つて居る。而已ならず、過度に頭ばかり働かすと、頭の仕事も病的になつて了ふ。運動不足で神經衰弱に罹つた文士などが、アルコールやコーフィーの刺戟で以て書いた感傷的な文章は、烈しい刺戟は與へるが、深い印象は遺さぬ。多忙な職業の隙から產れ出た著述の中に、案外に不朽の傑作がある。それに就ては、西國立志篇などに多く其の例が出て居る。其の外、天地有數と言はる大文字であつて、專門家の書齋から出たものは、殆ど無いと謂つて可いと思ふ。孔子でも、釋迦でも基督でも、乃至其の後の所謂賢人でも、決して只の學究でもなければ、文士でもない。皆それ〳〵世間に出て、當時の俗論と烈しく奮鬪した人達である。

勤勞と修養

修養と云ふことも近頃の流行である、是も好いことに相違ない。物質的慾望にのみ驅られて精神が空ッポウになつては、熱が冷めると煩

悶を始める。それ迄待たなくても、色々の弊害を生ずる。現に歐米の大都市に於て、老弱男女の總てが血眼になつて、名奔利走する樣を見ては、其處に人間墮落の兆を認めざるを得ないのである。去り乍ら又、曾子流に吾日に吾身を三省しても、之を實行と關係を附けねば、差して効力はあるまい。知人朋友の交際に關する失策位を三省して見た處で、それで以て有爲の人物になる、と云ふ譯には行くまいと思ふ。又修養の話を聽くことは必要であるが、是も只聽くばかりでは、暑い時分に風に吹かるゝやうに、一時心が清々する位な感あるに過ぎない。詰り、氣晴らしに長唄の一段も聞くやうなもの、と思へば間違ひない。尤も、是は世間流行の修養屋の話に就て言ふのであつて、眞に人格の聲を聽かせる人の事は、勿論、別問題と視て貰ひたいのである。

それはそれとして、一體、修養の話が聽く人の身に浸み渡るには、其の人に豫め期待が起つて居なければならぬ、所謂子を持つて知る親の恩であるから、自分の身に遭遇した事でなければ、之に關する話を聞いても、衷心からの感興は起らぬ。血氣正に盛んなる青年に向つて、死灰枯木に均しいものになれと言つても、効驗は少からう。之よりも此血氣を如何にして良い方面に向はしむべきかに就て、適當な活動の方法を敎へた方が遙に效果があらうと思ふ。それよりも更に一層多くの效果あるのは、此活動その物を爲さしめ、此活動その物に依つて本人の希望を滿足さすることである。心の中で活動さするよりは、體の上で活動さするが好いと思ふ。活動しつゝある間に起る疑問は、眞の疑問である。此疑問を解くが爲に話を爲して遣れば、此話は則ち其の人の期

待に應ずることになる。要するに、實行に關係ない空言空論は餘り役に立たぬものである。論より證據には、世間で修養談などを專門にするものに、碌な人物はない。寧ろ所謂ト者身の上知らず、と云ふ人が多い。若しあれば、其の人は必ず實歷より悟入した所謂苦勞人である。澁澤男とか、森村男とか云ふ人は、道學的に言へば、必しも完全な人物ではない。併し其の話は、道學先生の講釋よりも暗示に富んで居て、青年でも之に共鳴する所がある。それで、私は常に思つて居る、修身の途は矢張り實行を先にして、講釋は之に伴うて聽くべきものであると。

朱子學などで、存養などゝ言つて、人に修身を敎ふるに、恰も病氣保養の如くに、冷たい風にも當つてならぬやうに說くのは、誤つて居る。非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、など言つては、人間は皆社會から辭職して了

はねばならぬ。男子たる者は相當の年頃になれば、所謂當つて碎くる決心を以て、猛然として世の競爭場裏に出陣する覺悟がなければならぬ。此處で千挫萬折するも益〻勇氣を奮つて、とにかく難關を切拔けてこそ、玆に始めて其の人に多少の品性が出來るのである。顏回は溫乎玉の如き性質で、最もよく孔子の衣鉢を傳へた人と言はれ居るが、然らば此人は孔子の如き大人物であつたらうかと云ふに、それは甚だ疑はしい。本人は不幸短命にして死んだから能くは分らないが、孔子の如く壯年の時から幾多の艱難を閱歷して、精神を鍛ふた人でなかつたから、實際の仕事に當らして見たら、孔子の樣に、任官早々少正卯を誅して、魯國大に治まる、と云ふ如き手腕は、とても持つて居なかつたらうと思ふ。品性は意志を基礎とするものであるが、併し、意志其の物が則ち品

性となる譯ではない。鍛練せられたる意志、誘惑に抗し、困厄に堪へ得る意志であつて、始めて品性になるのである。それで、詰り、今日の競爭場裏に最も必要なる品性も亦、行爲、卽ち勤勞に依つて養成せらるゝことになる。

勤勞と知識

品性のみならず、知識も亦、此勤勞に依つて完成するものである。文字として、文字の意味を領會する丈では、實は眞の理解とは謂はれない。眞の理解は言葉で言ひ表はすのみならず、又形象に描き出すことが出來ねばならぬ。否、手で以て拵へ出すことが出來ねばならぬ。言葉を學んで、之を言葉で言ひ表はすのみでは、動もすると鸚鵡返しになる。

それで、他の方法にて之を現し出すことにして、其の理解の眞否を確かめる必要がある。今日の勤勞學校と稱するもので、圖畫や、手工を重んずるのは、實に之が爲である。東西共に文字尊重と云ふよりも、寧ろ文字拜崇の爲に、幾多學問の進歩を害せるかは、今日に於ては既に何人もよく知る所である。事實を枉げても、文字を生かさんと努むるのが、これ迄の學者の通弊であつた。古代希臘の醫聖ヒポクラテスが人間の身體はかくあると書いて置いたと云ふので、偶〻人間の內臟を見て、それに合はぬと、是は此人間が間違つて居る、と言つた時代さへもあつた。文字は事實に關する觀念を表はすものであつて、事實其の物ではない。而已ならず、文字は此觀念さへも十分に表はし得るものでない。文字で表はし得ざる所は、形象又は音響の表出で以て、之を補ふことにしな

ければならぬ。口で言ひ、尙其の上に手で描き、又は拵へて、始めて茲に完全なる觀念が得らるゝものである。かゝる觀念が土臺となつて、其の上に積み重ねられたる知識こそは、實に本當の知識である。困難なる閱歷に依つて試驗されたる品性の樣に、容易に動かされない、確固不動の知識である。立派な文字を集めて造つた昔の學問は阿房宮で、如何に壯麗でも、楚人の一炬で焚えて了ふ。然るに實驗で鍛ひ上げた今日の科學は萬里の長城である、見附こそ惡いが、根が堅い煉瓦を一枚宛、疊んで築き上げたのであるから、却々確りとして居る。西洋人の科學的思辨力が、其の量のみならず、其の質に於てさへも、我國民の其れと異なるが如くに思はるゝのは、或は此邊に由來するかも知れぬ。と云ふのは、從來我國の學問とは、多くは文字上の說明であつて未だ嘗てかゝ

る精嚴なる方法に依れるものでないからである。

勤勞と元氣

元氣と云ふ言葉は、誠に漠然たる意味のものであるが、併し、此言葉でなければ言ひ表はし兼ぬる或物がある。それで、西洋でも之に似たエナージーと云ふ言葉を用ひて居る。從來の心理學で云ふ智、情、意は只意識表現を其の性質から見ての區別であつて、之に通有する强さは顧みてない。然るに總ての意識表現には、此强さと云ふものが伴うて居る。獨り意識表現のみならず、生理現象にも同樣である。即ち人間生活其の物に、此强さと云ふものが具はつて居る。此人間生活に現はるゝ强さが、則ち所謂エナージーである、精力である。精力と云ひ、元氣と

云ふものが、實に人間の實力である。之を最も多く貯へ、又之を最も善く利用する者が、則ち最も偉い人物である。如何なる智者でも、才物でも、此エナージーに缺乏して居ては、何等大事を爲す事は出來ない。天才とは、畢竟、此エナージーの一方に傾注せるものである。それでこそ、相當の仕事も出來るのである。又、相當の仕事を爲せばこそ、天才が天才として尊重せらるゝのである。才子多病、多病でなければ才子でない、と云ふやうなデカタン的思想は、早く葬つて了はねばならぬ。

獨逸にエルンスト・ヘッケルに對立して、一元論の法王と呼ばるゝウィルヘム・オストワルドと云ふ學者がある。此人の主義は精力的命令法と名けて、「總ての精力を利用せよ、一の精力をも浪費する勿れ」と言ふのである。隨つて、彼は何事でも、苟も此主義に反するものを排擊する。

教育でも、如何なる美名の下に爲さるゝも、若し夫れが此精力を害するものであれば、彼は視て以て惡教育となすのである。かくて、彼は此見地からして、「學校の墮落」と云ふ一書を著して、盛んに獨逸近時の教育法を罵倒して居る。宗教教育、古典教育、暗記教育等は、彼の視て以て最も其の主義に背くものとなす所である。私も主義に於てはオストワルドに贊成するものである。併し、彼の議論は餘りに過激である。そこになると、ケルシェンシュタイナーなどの意見は餘程穩健である。ケルシェンシュタイナーも文字教育の弊を認めて、所謂書籍知識の効力の少き次第を盛んに主張して居る。而して一方には、生徒の自己活動と、自己創作と云ふものを奬勵し、其の方法として勤勞教育の缺くべからざるを說くのである。詳しいことは、別に私の前述の著書に述べて

あるから、茲には只是丈申して置く。

孟子の養氣説と精力主義

之に就て、孟子は頗る面白いことを言つて居る。彼は大勇を論じて、志と氣とを區別して、「夫れ志は氣の帥なり、氣は體の充なり、夫れ志至り、氣次ぐ、故に曰く、其の志を持ち、其の氣を暴する無れ」と云ひ、又、我れ善く吾が浩然の氣を養ふ……其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて、而して害する無ければ、則ち天地の間に塞がる、其の氣たるや、義と道とに配す、是無れば餒うるなり、是集義の生ずる所、義襲ひて而して之を取るにあらず、行、心に慊らざれば、則ち餒う」と言つて居る。今其の意を考へて見ると、孟子は、大勇の本質は氣である、然も此氣は義に雜つて、之と一緒

に自然に内より生ずるもので、外から這入つて來た義が無理に拵へたものでない、と視るのである。而して又、此氣を體の充なりと言つて居る處を見ると、彼は確かに此氣を以て今日で言ふエナージーの意味に取つて居たやうである。但し、彼は又、此氣は、それが義と道とに伴ふ場合、言葉を換へて云へば、志から帥ひらるゝ場合、或は心に願みて快き場合にのみ旺盛なるものであると云うて、彼の所謂大勇は道德的勇氣に外ならぬ旨を明にして居る。是亦今日の精力主義を唱ふる者の意見と何等異なる所はない。如何に精力を尊重すればとて、其れが惡い方面に外れても構はぬ、と言ふ者は一人もない。然らば孟子は、此浩然の氣を如何にして養ふ積りであつたかと云ふに、彼は宋人の苗を振いた例を擧げて、故意に助長してはならぬ、全く自然の發達に一任せねばな

らぬ、と言ふのである。而して此處は、今日の教育家の意見とは餘程異つて居る。今日の教育家は勤勞で以て精力を助長しようと云ふのであるに、孟子は道義の觀念さへあれば、それが自然に出來ると云ふのである。是は古今の事情の相違から生ずるもので、双方共にそれ〳〵理由がある。孟子の時の如き野蠻の境涯を距ること餘り遠からぬ時代に於ては、人間の自然に備へて居る精力は一般に非常に強いものであつたから、孔子の教などでは、禮樂とか何とか言つて、務めて之を抑へんとしたものである。然るに今日の如く社會が進歩せる時代には、所謂文明病の結果、人間の精力が日々に益〻衰へる許りである。それで、之を救濟するの途は、寧ろ人間生活を多少昔の野蠻時代に引戻すと云ふ必要があると思ふ。現に「自然に返へれ」「生活を簡易にせよ」とか云ふ叫の

聲の多く世に聞えるのは、即ち一般社會に於ても亦、漸く此必要を認めて居る、と云ふ證據ではあるまいか。

家庭に於ける勤勞の減退

今日の文明國の通弊は、家庭に於ける勤勞の減退せることである。日常生活は金さへあれば、一切手足を勞せずして出來る。西洋の都市では臺所なしで暮らして居る家族も少くない。既成品、出來合品で以て、總ての用事を辨ずることが出來る。誠に以て便利な世の中と謂ふべきである。處が、此便利と云ふことが、又、一方に於ては人間を墮落させる原因となるのである。工場や、商店に在つて、大なる機關の一部となつて、同一の仕事を器械的に繰返へす外には、何等自主的勤勞を爲さ

ないことになれば、如何しても身體も弱り、元氣も衰へるに相違ない。西洋人は概して勤勉であるが、併し、今日の仕事は其の性質が變つて、爲に此勤勉が其の人の心身に惡影響を與へる、と云ふ結果を生じた。日本では未だこんな場合には至らぬが、其の都市の生活は追々と西洋に似て來る。就中、家庭に於ける勤勞の減退する傾向は、日々に益々甚しくなるやうである。井戸水を汲む苦勞もなければ、洋燈の掃除をする手數も懸からぬ、下女迄が夜なべの針仕事の代りに、小說を讀んで樂むと云ふのが、現代都市生活の一班である。さればとて、勤勞が戸外に出で、工場などに於ける仕事が西洋の如くに甚しく多くなつた、と云ふ譯でもない。私は生活の便利に赴くのを呪ふのではないが、便利の爲、一方に勤勞の減退するのは、憂ひざるを得ないことゝ思ふ。勤勞の無い

處には、必ず安逸が生ずる。又、安逸の生ずる處には、必ず身體の衰弱と、元氣の消磨とが伴ふ。是が前に言つた通り、必至必然の因果關係である。勤勞は實に人間の守護神である。此守護神の在らざる所には、必ず惡魔が來り襲ふ。而して今や我都市の多くの家庭は、將に此惡魔の住家とならんとして居る。それで、我國に於ても亦、此弊害に對する救治法が、追々と必要になつて來たのである。

強き國民は勤勞より生ず　韓非の名論

以上、縷々述べ來れることを要約して見れば、勤勞は經濟發展の要素であり、人間生理の必須要件であり、學術の完成を助くるものであり、品性の陶冶を全うするものであり、知識の基礎を鞏固にするものであり、

人間精力の源泉を涵養するものである。此故に人間を怜悧にし、博識にし、及び優美にするには、從來の文字教育にても足るが、併し、人間を強くするには、是非共此勤勞に依らざるを得ない。強き國民、強き國家は必ず此勤勞の中より生ずるものである。學問の爲に學問する人間でなく、實行の爲に學問する人が、則ち興國の民である。私は固より學問其の物の効果を疑ふ者ではない。遠大高尚の理想を古典籍の中より求めて、之に依つて物質的欲望の羈絆を脱し得ざる卑吝の徒を救ふ事は、誠に今日の急務である。併し、總ての理想は、只空想として宙にぶら下つて居ては、何の役にも立たぬ。之を高根の花と眺めて居る丈でも、其の人品に好影響を與ふるも、要するに、其の人は薄志弱行の徒たることを免れない。加之、空言實行無き徒の多きは、實に其の國家の不祥事

である。之に關して、韓非子に名論が出て居るから、私の意見の代りに茲に之を引用する。曰く、「今や境内の民皆治を言ひ、商管の法を藏する者、家に之あり、而して國愈貧しきは、耕を言ふ者衆くして、耒を執る者寡ければなり、境内皆兵を言ひ、孫吳の書を藏する者、家に之あり、而して兵愈弱きは、戰を言ふ者多くして、甲を被る者少ければなり、故に明主は其の力を用ひて、其の言を聽かず、其の功を賞して、必ず無用を禁ず」と。今日でも全く其の通りであつて、是が千何百年と云ふ遠い古に在つて、當時の人を戒めた言である、とはとても思へないやうに、新しく感ずるのである。

更新は社會の進歩　理想は將來に在り

社會は進歩するを要す。社會の進歩は個人の發達に基く、個人の發達には繼承と更新との二方面がある。舊來の思想と絶縁せざるやうに教育するのは、今人をして古人の事業を繼承せしむる所以で、是も亦個人に取つては一種の發達である。龜の子が親其の儘に成長するのも、龜の子としては發達に相違なきも、是丈では世に不肖の子はなくても、親優りの子は出來ない。親優りの子が續々と出來てこそ、社會は進歩するものである。それで又人間は恰も鳶が鷹を生むと云ふ譬の如く、一代毎に親優りの子を造り出すの必要がある。思想上に於て、現代と過去とが絶縁するのは、極めて危險である。されば言つて、現代が只偏に過去に支配せられては、社會の進歩は全く停滯して了ふのである。理想は過去に存ぜずして、將來に在らねばならぬ。儒教流の回顧的教育は亡國的教育である。周は舊邦と雖、其の命維れ新なり、と云ふが如く、個人も亦日に新に、又日に新ならなければならぬ。而して此日に新ならしむる方法としては、矢張り勤勞教育に依るの外はない。文字から文字へと移り行いて、概念の内容と遠ざかるのみでは、何時迄經つても、各自獨得の意見は成立せぬ。古きを溫ねて新しきを知るは、學問の要旨である。然るに今の教育は、古きを溫ねて古きを知る丈で以て、濟して居るやうである。

活動は人間の天性　人は皆發明家なり

元來、人間は何人でも、生れながらにして發明家たる素質を具えて居る。小兒の破壞性や、好奇心や、懷疑心やは皆此素質の存在を證明する

ものである。又、何人でも、生れながらにして活動を好むものである。受動よりも作動を好むものである。受納よりも表出を好むものである。生徒たるよりも教師たるを好むものである。而して是も亦小兒の日常の擧動を見ればよく解かる。彼等は靜に椅子に座して先生の講釋を聽くよりも、運動場に出でゝ勝手に飛廻はることを好む。而も此處で、彼は自ら進んで銘々思付きの仕事を試みるものである。模擬もすれども創作もする。中には奇想天外より來る底の工夫を爲して、大人を驚かすこともある。然るに學校に在ること久しきに渉ると、不思議にも此活動や、創作の能力が減退して、只すら學校の示す型に入つて了ふ。

勤勞主義の教育起る

是に於て、久しい以前から西洋の教育家間には、此事に就て疑問を生じ、コメニュウスやルーソーの自然主義は之が爲に起り、其の後ヘルバルトの教育說が一時勢力を得て、それから又ヘルバルトにも反對があり、今はウント等の意志說がヘルバルトに代るなど、色々研究の末、現今では隨分極端な反動的施設も試みられて居る。教育の中心を教場から運動場作業場、試作場等に移すべし、と唱ふる者もある。甚しきは教育の成績は、教場の椅子が明いて居れば居る程好い、など說く者もある。エレン・ケイなどは雨天丈教場の教授を施して、天氣の好い日は屋外の運動工作等に從事せしむるを以て、教育の原則となすべし、と論ずるの

である。近來頻りに紹介せらるゝゲーリー學校などは、則ち此傾向を代表する施設の一つである。其の外、デュウィーや、ケルシェンシュタイナーなどの唱ふる勤勞主義の學校も亦、小兒の自己活動、自己創作を助長して、以て有爲の人物を養成せんとするのである。文字の奴隷たらずして、獨立的に判斷し、又、獨立的に行動し得る確乎たる個性を陶冶せんとするのである。彼等の考では、是でなければ社會に新しい精力は加はらない、隨つて其の社會は進歩するものでない、と云ふのである。

國是としての精力主義

列强間の競爭も、詰りは國民の精力の競爭である。若し此精力を數字で表はし得るとすれば、勝敗は既に其の上で決定するのである。獨

逸などでは夙に此點に着眼して、國家の總ての政策の根本を此精力の增進に置いて居る。其の學校教育は言ふ迄もなく、衛生行政の如きも、傳染病豫防と云ふやうな消極手段に止めず、如何にして國民の營養を佳良にし、其の住宅を健康にすべきか等、其の細目の實行迄に進んで居る。獨逸で言ふ社會政策は、私共の目から視れば立派な國家政策である。國民の一人宛の實質からして、之を根本的に改善せんことを以て、其の政策の目的として居る。最早、保健調査でなく、保健實行をやつて居る。或人の評した如く、獨逸では人間の一グランムをも無駄にせぬやう、其の政治上に於て注意して居る。麥酒を奬勵するのは、決して只國產保護の意味から許りでない、ウィスキイや、ウォッカーの如き强度の酒精を飲まさぬ用心に基くのである。我政府で釀造法の改善を試

みるのは、果してこんな意味が含んで居るであらうか、稅源涵養など云ふ事は能く耳にするが、之を國民保健の一事業としてやると云ふ事は、未だ聞かないやうである。又、獨逸で人口の減少を防ぐ爲に、乳兒、姙婦の保護に種々の手段を講じて居ることは、世に知れ渡れることである。墮胎の方法を敎ふる者の取締なども、頗る嚴密に行つて居る。而して是は國民の精力を、其の質の上からばかりでなく、兼ねて又、其の量の上からも增加せん爲になすのである。凡そ獨逸人ほど、人道とか博愛とか云ふ事を、メッタに口にしない國民はない。彼等の慈善事業は、多くは國家が自己の生存の必要から、自ら進んで之を爲すのである。此點は英米などとは、大に其の趣を異にして居る。

國民敎育家としての國家

國民の實質を善くする事業は、只學校敎育とのみ思ふのは舊い思想である。國家の總ての施設は間接直接に國民を敎化する。軍事でも、司法でも、警察でも、勸業でも、財務でも、交通でも、其の中には必ず幾分國民を敎育する意味を含んで居る。少くも國民の文化を催進すると云ふ意味を含んで居る。又、敎育と云ふものを、今日の學校敎育とのみ思ふのも誤つて居る。小學敎育を國民敎育など稱するのは、最も謂れないことゝ思ふ。小學敎育は小兒敎育であつて、國民敎育ではない。國民敎育は小學敎育のみの爲す事でなく、國家の總ての施設が爲すべきことである。國家の總ての組織を一貫する精神が國民を敎育するので

ある。學校教育は國民教育の基礎であり、中堅であるには相違なきも、國民教育其の物の總てでは無論ない。世に國民教育家なるものがありとすればそれは前述の國家の根本精神である。或は此精神を體現し、又は代表し得る人若くは機關である。自己の歴史を知り、自己の立場を識り自己を支持し、自己を擴張せんと欲する國家は、必ずや自ら進んで、其の總ての施設に依つて國民を教育せんと努むるに相違ない。殊に我國體に於ては、天皇は國家を統治し給ふのみならず、又國民を教育し給ふのが其の常であつて、現に教育勅語も下されてある。而して此廣い意味の教育は、如何なることを以て其の大方針と爲すべきかと云ふに、私は前に述ぶる如く、結局は、國民の精力を其の質と量とに於て增進すると云ふの外はあるまいと思ふ。忠君愛國も必要、勤勉誠實も

必要、博學多才も必要であるが、それよりも國民一般に通じて必要缺くべからざるものは、矢張り此精力であると思ふ。

教育的政治

以上の事は、議論としては何人も之を承認する所であるが、之を一國の國是として、意識的に、而も頗る久しい以前から着々實行して來たのは、前の獨逸である。獨逸の政治にも、固より一時的なる對外對内の所謂人氣取り政策もある。併し、其の大方針は常に此國是の遂行に存して居る。英國當りの政治家は、カイザーが國民の臺所の世話まで燒くのを見て、之を冷嘲して居るが、元來、獨逸の政治と云ふものは、英國の如く政治は對外本位であつて、内に向つては凡て非干渉主義を執るのと

は、大に其の趣を異にして居る。前述の如く、コツ〳〵と國民の一人宛から敲き直して、此處に國家永遠の計を立せんと欲するのである。こんな事は、他國では個人の問題であるのを、獨逸では之を國家の問題として居るのである。それで、同じ所謂社會政策でも、英國では勞働者の爲に只漠然たる養老年金の制を設くるに反して、獨逸では强制貯金の法を定めて、公金の浪費を防ぐと共に、勞働者の貯蓄心を養成する事にする。又、近來は前述の如く、とかく勤勞が家庭を出て了つて、家庭が荒敗すると云ふので、此點からして、夫婦共稼ぎの必要なき程度に於て、勞働賃銀の增加を圖るべし、と論ずる者もある。かう云ふ風に、所謂社會政策でも、獨逸にては必ず多少國民教育の意味を含めて、結局は、之に依つて兼ねて個人の實質を良くせんと力めて居る。こんな國柄である

から、其の學校教育の如きは、無論、此大方針に從つて施すのである。詰り、其の學校教育と云ふものは、其の一般の國是を遂行する一手段に過ぎないのである。學校を國家と對峙さして、國家が主として物質的の仕事を爲すに對して、學校は專ら精神的の仕事を爲し、思想界の改善進歩は、一に學校教育の成績に待つと云ふ風に、國家と學校とが、互に雅俗の仕事を分擔して居る譯ではない。國家の仕事も、一面に於ては皆精神的であつて、學校の仕事は更に一層精神的である、と言ふに過ぎない。隨つて、獨逸の政治を見れば、萬事が教育的である、否、少くも學究的である、調査とか、研究とか云ふ事業が、必ず之に伴ふて居る。其の代りに、又、其の學校教育は餘りに國家本位であつて、人道的な、世界的な處が少ない。合理的根本的ではあるが、ケチで、褊狹で、天空海濶と云ふやうな氣

風に乏しい。

國家の爲の個人主義

獨逸の學校教育は干渉教育である、然れども壓制教育ではない。毎に國家の利害から見て、學校教育を指導する點から言へば、確かに干渉教育である。然れども流石に學術の研究に長ずる獨逸人丈に、壓制教育を施して所期の目的に達することの不可能位は、よく承知して居る。但し、彼等は自由の爲に自由を與ふるにあらず、國家の發展の爲に之を與ふるのである。個性の爲に個性を重んずるにあらず、國家の發展の爲に之を重んずるのである。彼等が今日に於て勤勞教育を說くのも、教育に於て、十分生徒に其の個性を活動させ、且創作させねば、到底國家

有用の國民を造り得られぬことを悟つたからである。彼等が昔大學に所謂三大自由を認めたのも、只學術の自由を尊重するが爲にあらずして、是にあらざれば、國家の發展に貢獻する程の學術を產み出し難し、と信じたるが爲である。要するに、彼等が自由を愛し、個性を重んずるのは、打算的であり、隨つて絕對的ではない。彼等は徹到徹尾國家と云ふ物を忘れ得ない。今日の極端なる教育改革家と稱する者でも、獨逸人以上、若くは以外の人間を造らんと欲するのでなく、彼等の視て以て眞の獨逸人と做す人間を造らんと欲するのである。外國の影響を受けて變質せる今日の獨逸思想を一掃して、眞の獨逸思想を復活せしめんと欲するのである。ニイチェの所謂超人さへ、獨逸人は矢張り獨逸人のみが其れに成り得べきものと考へて居る。それでこそ、ニイチェ

の說が、特に獨逸に於て歡迎せらるゝのである。彼等はかくの如く萬事の目的を國家の發展に置いて居るも、併し、此目的を達する手段としては、是非共個性の尊重に依らなければならぬ、と云ふ事を知つて居る。それで、今此趨勢を一言にして盡せば、總じて國家主義を個人主義に依つて實現せんとするのが、獨逸の教育、其の他の諸政策の根本方針である、と言つて可いと思ふ。

ケルシェンシュタイナーの勤勞學校

以上の次第であるから、獨逸の個性教育は或程度に達すれば、必ず國家教育に移り行くのである。彼等には、何處迄も個性の發達するがまゝに一任する、と云ふ程の度胸はない。ケルシェンシュタイナーの如

き文字教育の排擊では一部保守派の反感を買ふた人でも、結局は、勤勞教育に依つて公民教育の目的を達せんと欲するのである。尤も、私は之が爲にケルシェンシュタイナーの意見を疑ふのではない、否、元來、大體に於て此人の說に贊同する者である。ケルシェンシュタイナーは社會を以て勤勞の組合と視て、勤勞と勤勞とが共同作用して、社會生活を成すものと言つて居る。それで、社會生活の準備の爲に設くる學校は又、此生活の縮圖でなければならぬ。即ち勤勞を本位として教育を施さねばならぬ。勤勞を好む心、勤勞に堪へる力、之を第一に養成せねばならぬ。それから、勤勞と勤勞との共同作用に必要なる顧慮心(互尊)とか、犧牲心(殉公)とか云ふ、諸ろ〳〵の精神を陶冶しなければならぬ。而も此陶冶は、從前の如く只文字上で試みるのみならず、殊に勤勞即ち

實行に由つて成就すべきである。又、一々實行し難い思想でも、成る丈實行され得らるゝ思想に聯關して、直觀的に敎へ込む、と云ふ方針に依らなければならぬ。と云ふのが、ケルシェンシュタイナーの勤勞學校の大體の主旨である。詰り、萬事を實行の上から自得させて行かう、と云ふのであるから、一種の實行敎育である、と言つても可からう、現にさう名けて居る學者もある。此主義の學校に就て批難をしやうとすれば、色々されないこともないが、併し、此敎育に依つて、從前動もすれば閑却されて居た勤勞精神の必要が高調されるに至つたのは、誠に喜ぶべきことゝ思ふ。彼の主義を實現するミュンヘンの實業補習學校は殆ど理想的に出來て居る。但し、我國には未だ直に之を學び得る丈の準備が整ふて居ないのは遺憾であるが、其の主旨に至つては、恐く何人にも異論のないことであらう。特に空理空論のみ多くして、薄志弱行の弊日々に益〻大ならんとする今日に於ては、私は何よりも先づ此主義の敎育を歡迎したいのである。

勤勞敎育と公民敎育との結合

尤も、學校で課する勤勞の按排に依つて、公民に必要なる精神的資格を養成せんとする彼の主張に對しては、私は其の或程度迄を承認したいのである、有體に言へば、私は此養成には前に述べたスクール・シティなどの方が、一層有効であるやうに思ふ。共同作用の理科的實驗、又は實習等に依つて、公民とし公務に從事する時の心得を敎へんとするのは、餘りに牽强の考案ではあるまいか、大工、鍛冶の工場には相當に分業

も行はれて、互に相依り、相輔くる關係に於て勤勞が爲されて居るも、大工や、鍛冶が特に公民としての資格を具えて居るとも思へない。勤勞教育が一般的に精神の諸能力を啓發することは疑を容れぬが、それが公民教育の手段として、ゲルシェンシュタイナーが言ふ程、特殊の効果あるか如何かは、私には未だ何とも言へぬ。現に私はミュンヘンの學校を參觀したが、其の折りの當局者の言に徵しても、實業學校としての成効は十分に認められたが、公民教育としての効果如何は未だよく分らない、と云ふ事であつた。尤も、一體、此學校の生徒は既に實際生活に觸れて居るから、之に公民須知などを授くれば餘程飲込みが好い、と云ふ丈は確かなる事實である。そこで、私は先づ此位な意味に於て勤勞教育の公民教育に對する効能を認めたいのである。要するに、勤勞教

育に公民教育を結び附くるのは便宜であるが、併し、勤勞教育は何處迄も勤勞教育であつて、勤勞の爲しように依つて、それで、直ちに公民の精神的資格が出來るもの、と速斷してはならぬと思ふ。

公共事業は公共心を養成す

併し、今日の青年團がやつて居る各種の事業は、多くは公共的のものであるが故に、事業其の物でなく、其の目的が、則ち之に從事する者の公共心を養成することになる。村の爲に害蟲を驅除し、村の爲に道路を修繕し、村の爲に風俗を矯正し、村の爲に災難を豫防す、此村の爲と云ふ一語が、即ち青年の公共心を刺擊し、又之を陶冶するの効力がある。此點から見れば、今日の青年團の事業は立派な公民教育である。況んや、

更に一歩を進めて、此事業の公共團體に於ける位置と、之に對する關係とを知らしむれば、愈〻以て公民教育の實を擧ぐることになる。公共心はあつても、之を實際に表現する機會がないと、其の心は衰へて了ふ。之に反して、公共心は無くても、數〻公共の爲に働くと、其の心が自然に生じて來るものである。總じて人間の心は、譬ば馬である。時々乘廻はさぬと強くならぬ、放つて置けば萎縮して了つて役に立ぬものである。それで、私は從來の青年團の事業は、青年團が修養機關となつた今日と雖尚繼續してやらしめたいと思ふ。修養機關であるからと言つて、修身の講釋のみを聞かせることの不可なるは、前に說いた通りで、眞の修養は却て勤勞に依つて出來るものである。青年團が事業を主とするが爲に、動もすれば自治行政に容喙して其の弊に堪へぬと云ふ批難あ

るが、併し、其の原因が政黨などの惡感化にあらざる以上は、是は其の一面に於て、青年自覺の兆を示すものであるから、見樣に依つては、必しもさほど憂ふべきことでないと思ふ。但し、徒に虛名を博せんが爲に、事業の爲の事業を起して、却て各自の本務を怠るが如きは、本末顚倒の甚しきものであつて、大に戒むべきことである。要するに、修養の手段として、必要に應じて公共事業に從事するは、毫も差支へはないのである。

勤勞の精神と充實生活

概して言へば、我國農村の青年には比較的閑暇が多い。是は單純なる我農業組織の然らしむるものであるから、今日では農家の副業の奬勵と云ふことが、殆ど一般の輿論になつて居る。此閑暇を利用するこ

とにすれば、農村の青年には尙多くの仕事を課しても可いと思ふ。勤勞教育は則ち其の素地、否、其の基礎を爲すものである。勤勞を好む心、勤勞に堪ふる力、之を養成し得れば農村青年の氣風は必ず一變するに相違ない。農村青年が動もすれば懶惰に流るゝのは、一は其の勤勞の性質にも因る。單調にして變化なき普通農事の如きを、在來のまゝにて營んで行くことは、恐らく有爲なる青年の堪へ難く思ふ所であらう。殆ど器械的に毎年同一の仕事を繰返して、何等の新工夫を要しない、其の上、一生土地に結び附けられて身動きが出來ぬ。況して、見る物、聞く物、總て刺撃なければ、其の心も體も自然に不活潑になる、樂みは夕顏棚の下涼みと言ふも、是は外間からの詩的想像で、本人に取つては、さほどの樂みにもならぬやうである。かくの如くにして、農村の青年は、續々

と此面白くなき鄕里を見捨てゝ、都市に集中する、然らざれば飲酒に耽り、之に依つて强ひて生活の單調を破らんと企つる。是に於て、農村荒敗の弊が起つて、其の救濟の方法が社會の一問題として盛んに討究され、曰く、愛鄕心を鼓吹せよ、曰く、多くの娛樂を與へよ、曰く、村社の祭典を盛んにせよ、曰く、盆踊の取締を寬にせよ、など云ふ類の名論が有り餘る程出て居る。併し、私の見る所では、是等も必要であるが、それよりも先づ青年に勤勞の風、風ではいけない、勤勞の精神を起すことが、更に最も必要であると思ふ。勤勞を好む心、勤勞に堪ふる力、之を養成するにあらざれば、農村の救濟は未だ根本的には爲されないと思ふ。勤勞の精神、其の物は、夫れ自身既に人間の內界を充實して、之に滿足を與ふるものである。加之、此精神は、未だ仕事を有たぬものには之を見附けて遣

り、既に仕事を有つ者には之を改善して呉れるものである。勤勞の精神は勤勞に生きる精神であるから、此精神さへあれば、人間は何處にでも仕事を見出して、其處で以て滿足し得るものある、即ち所謂充實せる生活を爲し得るものである。仕事を見出さない、又は見出しても之を樂まない者は、何時も其の心も體も落着かないで浮いて居る。こんな人は如何なる仕合せな處に在つても、又、それからそれと心が移つて行くものである。孟子の所謂「恒産なき者は恒心無し」の恒産は財産でなく産業である、即ち一定の産業に勉める者でなければ其の心が定まらぬと言ふのである。是は實に千古の名言である。併し、産業は授與するよりも發見せしむることにして、始めて其の効果が一層多いものである。それで、今日農村荒敗の一原因たる都市集中の弊を矯めるにも、

第一に、仕事を授くると云ふよりも、寧ろ此勤勞の精神を養成して、自ら進んで仕事を見出し、且之を樂むと云ふ氣風を造り出すやうにすべき事と思ふ。

勤勞教育は勞働教育にあらず

青年團が公共事業を助くるは可い。併し、此事業は不斷に繼續するものでない。中には、一度爲せば、それで事終るものもある。而已ならず、不慣の素人の參加を許さない仕事もある。それで、原則としては、公共事業は公共團體共れ自身の責任を以て經營すべきものである。隨つて、青年團に勤勞教育を施すに當つては、かゝる不定隨時の仕事許りを當てにしてはならぬ。別に補習教育に於て、各自の職業と關係を保

ちて、不斷に勤勞精神の養成に努めねばならぬ。然らば其の方法は如何と云ふに、先づ大體に就て言へば、各種の學校等を利用することである。實業補習學校は勿論、小學校、中學校、高等女學校、師範學校、甲乙種實業學校の外、各種の試驗場及び講習所等を利用して、此處で以て、青年の年齡學力に相當する一種の補習教育を施すが可いと思ふ。而して此補習教育は、生徒の職業を顧みて爲す點から見れば、勤勞教育であるが、併し、總ての職業を此學校に持込んで教ふると云ふ譯にも行くまい、實地の練習は家業に讓つて、學校では單に理論を講ずると云ふ事を免れないが、それでも、本旨の勤勞教育を忘れねば、必ず相當の効果はある。勤勞は無意識に爲さるゝ勞働ではない、ケルシェンシュタイナーは此勤勞は生産的のもの、即ち生産的勤勞でなければならぬと說いて居る。

尤も彼の所謂生産的は、經濟學で言ふ生産的とは多少意味を異にして、教育的に見て何物かを産み出すもの、即ち知識、道德等の上に良好の影響を與ふるものを指すのである。是故に、勤勞を生産的ならしむるには、是非とも勤勞其の物に關して相當の理解を有つて居ることが必要である。只器械的に從事する勞働は、決して良い教育的効果を生ずるものではない。然るに右の如く生徒の職業に就て學理的說明を與ふる時は、其の仕事が、器械的勞働より進んで生産的勤勞になるのである。

心にも汗する勤勞たるべし

何事か爲すのは何事も爲さゞるに勝る、孔子の所謂博奕も亦已むに賢れりとは、則ち此意である。然れども凡そ仕事さへすれば其れで可

い、と云ふ譯では無論ない。茲に言ふ勤勞は、前述の如く、第一に其の目的が善良でなければならぬ。目的が善良であれば、其の仕事の性質は惡くても可い場合もある。例へば、君主の爲に犬馬の勞を執る、と云ふことがある。犬馬の眞似をすることは、決して善い仕事ではないが、是がやがて忠義と云ふことになつて、道德上の價値を生ずる。國家の爲に敵と戰つて之を殺すことも、仕事としては善くないが、是も其の目的の上から道德化せられて、愛國的行爲として稱揚せらるゝのである。此場合に於ては、仕事を意志の表現として見て、其の是非を仕事其の物に加へずして、仕事の原因たる意志に加へるのである。第二には、是も前述の如く仕事の性質が善くなければならぬ。而して此場合に二つの區別がある。一は道德的に考へて善いもの、他は教育上から見て善

いものである。道德的に考へて善い仕事とは、其の目的も性質も共に申分なきもので、例へば、文化を進めんが爲に教育を施す、と云ふの類は則ち夫れである。又、教育上から見て善い性質の仕事とは、仕事其の物が、之に從事する人を教育する効力を有するものである。例へば、理解されたる仕事、工夫されたる仕事などは、則ち其の例で、其の他之を課する方法の如何に依つて、諸ろ〳〵の能力を陶冶する仕事もある。ケルシェンシュタイナー等が、例へば、理科の實驗の如きを數人の生徒に分担さして、共同の力を以て之が結果を見出さしめ、之に依つて、共同心や、責任心を養成せんとするのは、則ち仕事の課し樣に依つて、其の性質を教育的に爲さんとするものである。元來、實驗は知的教育力あるも、道德的教育力はない。然るに右の如くにすると、此効果が生ずるのであ

る。それで、同じ勤勞を奬勵するにしても、其の効力を一層多くせんと思へば、仕事の目的、仕事の性質の外、尙其の課し樣に注意することが、大に必要になつて來るのである。又、此課し樣は、右の如く只其の配當按排の如き形式のみならず、其の內容、即ち其の强さ、深さをも顧みなければならぬ。肢體の仕事が肢體の仕事たるに止まらず、併せて頭の仕事たるに至らなければならぬ。腦髓に深い痕跡を印し、永く磨滅せざるを要する。知識は知識として精確であるのみならず、必要に應じ何時にても實行に變じ得るものでなければならぬ。之と同じく實行も亦實行として熟達するのみならず、每に知識道德などと關係を有つて、之を增進し、確實にする、と云ふ効力を具えて居なければならぬ。俗に言ふ、犬も歩けば棒に當るの犬棒主義の勤勞は、何の役にも立たぬ。如何

なる勤勞でも皆、前に述べたやうな幾多の効果を自然に生ずるのではない。勤勞の必要は固より論なき所であるが、更に必要なることは勤勞の選擇を嚴にすることである。額に汗するのみならず、併せて心にも汗する仕事にして、始めて之を善良なる文化的勤勞と謂ふことが出來るのである。

勤勞教育と理想教育

農村の教育と云へば、とかく餘りに實際を重んずる結果、動もすると品位を墜す迄に至ることがある。農民の子弟に理想教育を施す事は、却て之をして稼業を怠らしむることになる、と考ふる人さへある。併し、是は實際上にも、又理論上にも、共に許し難い意見である。丁抹の平

民高等學校の事は、私は他の著書の中に說いて置いたが、此學校の敎育の大方針は、開祖グルンドヴィッグの遺意を奉じて、專ら人格の養成をやることになつて居る。校長敎員にも主として同主義の人物を採用し、師弟寢食を共にし、國語國史の講義に依つて精神の修養向上に努める。就中、此學校の最も重きを置くのは、所謂活きた言語に依つて聽者の心を根底から動かして、反省自警することである。講演の成功は拍手喝采の響く處にあらずして、微かに靜肅を破る溜息を聽く事に依つて知らるゝと云ふのが、彼等の仲間に於ける信條の一つである。此學校は一種長期の講習會で、冬季は男子の爲に、夏季は女子の爲に開き、入學者は八分迄は農家の子弟である。丁抹には此外に農業補習學校も澤山あつて、此學校は之と對立して一種普通の人女的陶冶を授くるのである。誠に贅澤な施設の如くに思はるゝが、併し、其の農業上に及ぼす影響は實に大なるものである。就中、同國の產業組合の普及發達は、主として此學校のお蔭だと言はれて居る。其の他、一體、丁抹は農民の天下と稱せられ、政治、文學、美術等迄悉く農民の手に歸して居るが、其の原因も亦、實に此學校の人格敎育に在る、と云ふことである。此例に依つて考へて見ても、農民であるからと云つて、只農業の事許りに沒頭さするのは、却て農業の不振を來す所以となるのである。如何なる職業でも、其の健全の發達は、矢張り其の人の人格が基を爲すものである。美術家のラスキンが勞働者に藝術敎育を授くるの必要を說いたのも、詮する所、之に依つて勞働者の品位を向上せん、との趣旨に外ならぬ。農民が泥塗れになつて働くのは、其の誇りとすべきであるが、心迄も汚

されてはならぬ。泥中より咲き出る蓮の花の如く、心許りは飽くまでも高潔でなければならぬ。普通學科の外、健全なる鄉土文學、鄉土藝術等に依つて、素樸なる心にも理想の天地を開拓して遣らねばならぬ。足元に用心せしむるは必要なるも、一生唯地上を匍匐膝行せしめんとするのは、これ農民を動物扱ひにするものである。

次ぎに又人間の一般心理狀態から考へて見ても、青春の血湧くが如き時代に於ては、空想にせよ、何等かの理想を追求して已まぬものであるから、此間に其の理想に達するの途を開いて遣ることが必要である。それで、何れの學校教育に於ても、特に重きを此點に置いて居るが、併し又、さうなると、聊か理想食傷の氣味が生ずるのである。處が、小學校を出てから、何か實業に從事して見ると、復、學問に親みたくなるものであ

る。農家の青年などが、自家の職業に直接關係ある農學の講義を聽くよりも案外好んで小說を讀んだり、發句俳諧を詠んだりするのは、皆之が爲である。此傾向が極端に流れると、農村の風俗を華美柔弱にする、と云ふ恐れあるが、併し、よく之を利用すると、之が爲に農民の品位を向上することになつて、利益も亦少くない。前の丁抹の平民高等學校では、小學校を卒業してから、凡そ一二年間實業に從事して、其の人の心に、尙一度學校教育を受けて見たい、と云ふ希望が起つて、始めて之に入學を許す、と云ふ事になつて居る。一の學校の腰掛から直ぐに他の學校の其れへ移つて行くと、如何も學問に對する興味が薄らぐと云ふことを免れない。仕事の轉換は人間の心を更新して、其の生氣を維持するものである。同一の仕事に永く一意潛心するのは、專門家たるには必

要なるも、人格の修養の爲、又は職業の參考の爲に、學問を利用せんと欲する者は、餘り是に深入りせず、所謂餘力あれば以て文を學ぶと云ふ程度に止めるが好いと思ふ。かくの如くすると、學問しても學問の弊を受けざるのみならず、如何なる職業に從事して居ても、自ら品位ある人物になることが出來る。それで、此意味に於て農村の補習教育に於ても亦、人格教育を怠つてはならぬ。勤勞教育を勞働教育と同視すべきでないことは、既に前に說ひた通りである。

所謂補充教育の方法

青年團員の年齡は十三歲より廿歲迄で、中等學校生徒の在學年齡よりは大分延びて居る。之に相當の教育を施して行くことは、却々容易

でない。何時迄も小學校許りに引留めて置く譯には行かない。それで、私は前述の如く總ての中等學校に於ても、彼等の爲に適宜相當の補習教育を施すが可いと主張するのである。尤も、茲に所謂補習教育は當該學校の教育の補習でなく、青年團員の教育の補習である。青年團員の從來の教育の不足を補ふ爲の教育である。彼等の立場からして必要を感ずる教育を、特に授けて遣るのである。それで、實は補習教育でなく、補充教育とも名くべきものである。富該學校本來の目的とは何等關係のない教育である。而して此補充教育は、前に言ふ如く勤勞教育を本旨とするも、青年團の目的は他にも色々あるが故に、併せて此目的に叶ふ公民教育及び愛國的尙武教育も、無論此處で施すべきものである。尙此教育を施すに就ての實際の方法を一言すれば、其の低學年

に於ては、今日の實業補習學校の形式に依り、其の高學年に至つては、英國邊に行はれて居る大學通俗講演の方法を參酌するが可いと思ふ、此講演は今日では一種の繼續的講習であつて、聽講者の學力に依つて學級を分ち、師弟の關係を親密にし、試驗の制度を定め、修業卒業の規定も設けられる等、頗る系統あり、組織あるものとなつて居る。此方法に依りて中等學校を利用し、尙其の上に更に高等の學校教員等の援助を借らば、青年團員の補充教育は必ず相當に出來やうと思ふ。尙又右の英國、其の他の通俗講演の實際上の施設は、拙著の「歐米通俗教育の實際」に述べてあるから、委細は之に讓つて、玆には略する。

更に一言すべきは、此補充教育に於ては、特に彼の目下盛んに奬說さるゝ自學自習に重きを置く事である。自學自習は總ての教育に於て

必要であるが、就中かゝる變則の教育――教員設備等に不足勝ちなる教育に於て必要である。生徒に自學自修の精神が旺んなれば、右の如き缺點は或程度迄は補はれる。而已ならず、元來、此自學自習と云ふ事は、我が國古來の教育法であつて、現に地方の夜學などに於ては、尙此方法に依つて居るものが多い。輪講、會讀などをやつて、互に質疑討究することは、教員の手を省くのみならず、又、大に生徒の獨立的研究心を養成する。亞米利加の如き獨立獨行を重んずる國では、今日でもリーディング・サークル即ち讀書會が頗る組織的に發達して、會の決議を以て卒業免狀樣のもの迄授くることになつて居る。是等は我國に於ても餘程參考に資すべきものと思ふのである。

愛國的尙武教育

愛鄕心とは何ぞ　平凡なる難問題

愛鄕心とは鄕里を愛する心である。然らば鄕里とは何ぞと云ふに、此解答は案外に單純でない。生れ故鄕即ち自己の誕生地も其の一である。併し、今日の如く移住の頻繁なるに當つては、生れて直ぐに他に轉ずることもある。それで、墳墓の所在が即ち鄕里であると看る人も多い。其れも一說であるが、それにしては、一度も足此墳墓の地を蹈まずして、他鄕で暮らす人もある。法律上では、本籍地と住所とを區別して、住所は當人の生活の本據を指す、と云ふことになつて居る。然らば

此住所を以て鄕里となすべきかと云ふに、さうもゆかぬ。といふのは、當人に於ては矢張り誕生地を以て鄕里と考へて居る場合が多いからである。それでは、本籍地、即ち鄕里かといふに、さうでもない。本籍は何處にでも移すことが出來る。特に女子は一般に他人の籍に入るのであるから、さうすると、女子には鄕里と云ふものはないことになる。

さらばと言つて、住所は鄕里にあらずとすれば、都市の如く寄留人の多い處では、住民の多數に對して愛鄕心を責めることは出來ないと云ふ始末になる。かくの如く、鄕里と云ふものは、解り切つて居るやうであつて、さて、其の眞相となれば、一寸捉へ難い所がある。併し、實際に於ては、我が國民の大多勢は其の地に生れて、又、其の地に死するのである。それで、是等の人々の鄕里と云ふのは大概極つて居る、即ち誕生地(多く

は本籍地がそれである。然らば初めから誕生地を離れて、轉々其の居を移す者は如何と云ふに、是等の者と雖遂に何處かに永久の住所を定めて、之を以て其の郷里と心得て居るものが多いのである、所謂第二の郷里は則ち是である。そこで、實際上本人に於て自己の郷里と視做して居るのは、右の法律上で云ふ本籍地と、住所の二つから成る場合が多いと視て差支ないやうである。隨つて、餘り窮屈に解釋して、郷里は誕生地とか、又は祖先墳墓の所在とかに限るとすれは、愛郷心の養成は、今日の如く住居の自由を認めたる時代に於ては、却て色々の弊害を生じ、特に自治制などの發展を妨害することにもなる。

郷里の心理的觀念

以上は、主として當人の立場から視ての郷里であるが、併し、所謂郷里と當人との間に於ける精神的關係を、今少し細かに研究して見ると、右の二種の者の間には甚しき差異がある。元來郷里に關しては法律的觀念と、心理的(又は教育的)觀念とのの區別がある、法律的觀念によれば、郷里とは當人が現に其の生活の本據即ち住所を有する公共團體であるから、前の所謂第二の郷里も之に屬するのである。然るに心理的觀念に從ふと、郷里とは其の人の精神と最も密着不離の關係を有するものでなければならぬ。チエー・シュルッといふ獨逸の教育學者は、此點から郷里を説明して、郷里とは、一定の自然的、人事的情況を有する一の地域であつて、各個人に最初の、而かも毎に強い情調を伴ふ印象即ち當人の內的生活の如何なる變化にも關せずして、よく其の個性の爲に恒久

的基礎となる所の印象を與ふるものである、故に鄕里とは、人事生活にあれ、若くは自然生活にあれ、又は其の現在に屬すると、若くは其の過去に屬するとを問はず、總て當人自身に於て親しく直觀し、又、親しく體得したるものゝ總額に比すべきものである」と云つて居る。此說に從ふと、敎育上で言ふ鄕里は、唯其の人の誕生地、而かも少くも其の小學校時代を送るところの誕生地のみに限らねばならぬ。斯かる意味の鄕里が、法律上の意味の鄕里と同じである場合には、恰も生みの親を親とする樣に、人情も義理も自然に兼ね備はつて、洵に申分がないが、さうでないと、義理はあつても人情はない、ない事は無くても、少くも薄いと云ふ事を免れない、言はゞ、養子根性に過ぎないと云ふことになる。然らば此處を其の人の鄕里と視るのは不可であるかと云ふに、さうでない。

養親でも親は親であると同じく、第二の鄕里は鄕里に相違ない。況して、我が物と思へば輕し傘の雪で、一旦、此處を我が鄕里と定むれば、自然之に對する人情も生じて來るものである。生れ故鄕に對するやうに純潔なる詩的な愛情は起らぬとしても、住み慣れて見れば、ともかくも其處に一種の精神的關係を生ずるものである。それで、前述の如く、私は此鄕里を主として敎育的に扱ふ場合でも、前のシュルツの說明よりも、モット廣い意味に解釋したいのである。

鄕里の範圍如何

次に又、鄕里の範圍は如何と云ふ問題もあるが、是亦頗る面倒なものである。前のシュルツの說明では、鄕里の與ふる精神的印象の性質は